

道徳上の悪

ルツ-の眞髓

我々をして不幸ならしめ不善ならしむるものは、我々の能力の濫用である。我々の悲哀、我々の憂慮、我々の苦痛は、我々自身から生ずる。道徳上の不善は我々自身の仕事であることは争ふべくもない。又悪徳が我々の苦痛を感知せしめないとするならば身體の病苦な我等に苦痛を與ふること殆ど無いわけである。

自然は我々を保護せんが爲めに我等に慾望を感知せしめるではないか。身體上の苦痛は我々の機體の亂されて居る徴候であつて、機體の保護をば我々に警告するのではないか。——死とな！——悪人は自己の生命と我々の生命とを共に毒しはしないか。誰れか永遠に生きんことを欲するものぞ。死は我々が已に

持ち來した害悪の治療である。

自然は永久に我々を不幸に苦しめないであらう。元始的の質朴を續くる人は、如何に悪に制せられることが少いであらう。斯の如き人は殆んど病苦もなく情慾も無くて生活し、且つ死を前知することも又感知することも無いであらう。彼が死の近けることを感知する時には、彼の困苦は死を望しきものとならしめるであらう。是に於てか最早死は彼に取つて害悪ではないのである。若し我々にして在るが儘に在ることを以て満足することが出来るとしたならば、己の運命を歎く道理は無い筈である。我等は架空的幸福を求めて、自ら百千の現實な不幸を齎らす。少しの苦痛を忍ぶことを知らぬ人は、多量の苦痛を豫期せねばならぬ。我々は不規則な生活に依つて身體を壊す時には、藥石を以て之れを再興せんとする。我々は我等の感知する病苦に加ふるに、我等の怖るゝ所を以てする。即ち死の前知は死をして怖ろしきものたらしめ、猶其來ることを速な

眞の-ツル

らしめる。我々は死より逃れんと欲すれば、欲するほど益々之れを感知する。而して我々が自然を害いて自ら其身に齎した害悪の爲めに、自然に對して不平を鳴らして、壽命ある間恐怖心に襲はれながら死ぬのである。

人よ。汝は最早や害悪の作り主を求むること勿れ。害悪の作り主は汝自身である故である。汝自ら作つたのであるか、若しくは汝の受くるもの、他には害悪は存在しない。而して此等二つは共に汝より出でたものである。普通の害悪は唯だ不秩序に原因することがある。而して私は世界の系統の中に不變の秩序を看る。個人的害悪は唯だ苦を受くる者の情操の中にのみ在る。而して此情操は自然が人に與へた者ではない。人が自ら其身に齎した者である。苦痛は反省に慣れぬ、過去を回顧することも未來を豫想することも無い、人には、殆んど何等の勢力も無い。死滅的華美を取り去れ。我々の惡徳と、誤謬とを取り去れ。之れを要するに人々の仕業を取り去れ。然うすれば總てが良好になるであらう。

情

我々の總ての情の源泉であり、又他の總ての原理の根本原理であつて、人と共に生れ、人の生存する間は人より去ることの無いものは自愛心のみである。自愛心は元始的生得の情であつて、他の總ての情よりも以前に存在してゐた。而して他の總ての慾は單に自愛心の變形に過ぎない。我々の理解力と情とは互に相助け合へるものであつて、我々の理性の圓熟するのは、情の働に依つてである。我々は單に智識の上達から快樂を得んことを望んで、智識を求めたる欲望をも恐怖をも持たぬ人が何故に推論する勞を取らうか。是れは考へ得ざることである。情は代る代る、其起原を我等の要求に發し、其進歩を我等の理會力に發する。何故なれば我々は或る對象物に就て構成した觀念から若しくは自然の

單純な衝動からでなくしては、何物をも欲し若しくは恐れることを得ないからである。情には耽溺しても差支なきものと、耽溺す可からざるものとの二つ有つて、溺耽しても差支なきものには我々を委ね、耽溺す可からざるものには我々を節制す可きものであるといふ見解は誤りである。總ての情は我々がそれを支配する時に於ては悪である、情が我々を支配する時に於ては悪である。自然は我々の執着をその力以上に擴張することを許さぬ。我々が手に入れることの出来ぬものを望むことは、理性の許さぬ處である。誘惑を避けんとすることは總て如何なる時にも不可能である。唯だ良心のみが決して誘惑に征服されぬ様我々に命ずる。征服されぬ情を有する、有しないは、我々の力に倚るのではないが、若し我々にして情を調整したいとしたならばそれは我々の誤りである。如何なる情操も、理性の統御の下に在れば、皆正義なりとせられる。而して我を支配する情は、皆罪有るものである。大なる情の満足せられる時は、我々

は小なる情より離れる。大なる情の満足に次で来る心の平和は、單に享樂に依つて増大せられた感覺である。如何なる種類の熱情も、小兒に示すことは最も危険である。過度なる情は常に其中に人を樂ましめ誘惑し、又人々をして恐るべき筈の物を愛せしめる、或る下らぬ性質を有する。此理由の爲めに、我々は皆演劇を好み、又或る者は小説を好む。

總て大なる情は獨居のうちに形成される。何物も永續的印象を作る時間のないやうな所、雜多の趣味が情操の力を弱むるやうな所には、我々は斯様な大なる情に遭遇することが無い。輕微の情は變化を受けずして常に其目的物に向つてゐる。然し我々は、大なる情に對するが如く輕微の慾情夫れ自身に對しても武装するがよい。

我々の獨居に於ける視方と感じ方は我々が世間と交はつて視若しくは感ずる所と大に異なる。世間と交はる時は、我々の情は種々に様化せられ、又種々の表

はし方を以て發せられる。獨居の時には想像は絶えず同一の目的物を目指すが故に、想像は其目的物から一層強い印象を受ける。而して此僅少な心象は、絶えず出沒して總ての觀念に干涉する。我々が獨居生活を送る人々の談論に於て注意する奇妙にして單調な傾向は、是れから生ずるのである。この點からして獨居生活を送る人の會話には力が有ると斷定することが出來ようか。否、全く然うではない。是れのみは別段である、我々が力強く言ひ表はす事を學び得るのは、唯一つ世間と交はることによつてである。何故なれば、第一我々は常に人によつて異つたやうに話し、又他の人々よりも好く話すことが必要であり、そして自分の信せざる所を常に肯定し、自分の所有せざる情操を言ひ表はして、その云ふ所に人を説服する傾向を與へようとする。汝は偽のない感情を有する人は自然能辯の代りに、我々が演劇若しくは佛蘭西の小説に於て稱賛する、力強い、勢有る、説服するに巧な話方を有して居るといふことを信するか。否、

情の漲る時の言ひ表はし方は力が有るといふよりは寧ろ有り餘るのである。溢るゝ情慾は人を説服せんとさへもしない。而して其眞實を疑はれようなどは其情の思ひも寄らぬ所である。此漲れる情が其思ふ所を云ふのは、之れを他に傳へんとするよりも言つて自ら心を安らかならしめる爲である。愛は都會に於て描寫される。是れは茅屋に於けるよりも猶多く感せられるが故であらうか。

先づ機智に抽でんと欲する作者の其密室に於て書いた艶文を見よ。若しも其作者にして或る熱誠を有するとすれば、其手紙は其句に従つて將に紙をも焼かんとするであらう。然し熱氣は夫れ以上遠くは行かない。汝は惱殺せられ恐くは心をも攪亂せられるだらう。然も、是れは唯だ言語以外には何等の追想をも殘さぬ一時的な輕微の情たるに過ぎない。是れに反して戀が眞に口述する手紙、眞實な愛情深き戀人の手紙は、言葉數多く、長く、野趣を帯びて、繰言に充ちて居るであらう。溢るゝ情を以て全く壓倒された眞の戀人の衷情は、急流の常

ルツ-の眞體

に馳つて絶ゆる事無きが如く、永久に同一の事を繰り返して、盡きることがない。而して之には何等の燦爛たる警句も無く、何等の顯著なものも無い。又我等の目には言葉も、言ひ表はし方も、辭句も留まらないのである。我々は何物をも賞讃せず、何物にも感動しない。然しそれにも拘らず、我々の心靈は感動され、又我々は譯も無く心を動かされたことを感ずる。情操の力によつて心を打たれたのでないとするも、我々は情操の誠によつて感動されたのである。斯の如くにして心情は他の心情に話す。然し感情を持たぬ人乃至唯潤色した情の諧語を有するに過ぎない人は、此種の美に就て何等の知ることも無く、却つて此等を賤しめる。

熱狂は情の頂點である。一度情が其頂上に達した時には、其目的物は完全に見え、天に置かれた神の像となつて見える。

我々は我々の愛及び嘆美の對象物に書簡を書くのではなくて、是れに讚美を

述べるのである。大なる情は決して薄弱な人々の間には見られない。

情にして一度心を占領すれば、我々は生活に倦くやうになる。

然し情の支配する間は、情は其與ふる苦痛を忍ばしめる用を爲す、情は希望と欲望とを融合する。即ち我々は我々が將來、幸福になることを望む間に、現在の幸福を棄てること出来る。假令我々は希望の對象物に達することが無いとしても、希望は猶生育する。而して幻影の魅力は其幻影を生せしめた情の續く限り繼續する。それ故に、此状態は自らを維持する。而して此幻影の生む不安の念は、現實の代りとなる快樂の如きものである。我々は大なる情を抑壓するとも、此等を上品ならしめることは殆ど無い。情を取締る唯一の手段は、一の情に耽溺して他の情を服従せしめるのに在る。我等は此手段に依り情の力を以て情の専横と闘はなければならぬ。而して我々は自然から自然を整頓するに適する武器を受け取らなければならぬ。

情の眞體

心霊に従はんが爲に、肉體は強壯でなければならぬ。善良なる僕は壯健でなければならぬのである。私は、不節制が情慾を挑發することを知る。不節制は亦早晚肉體を憔悴せしめる。斷食と難行苦行は其正反對の原因に依つて往々同一の結果を齎らす。肉體にして虚弱なればなる程肉體は支配され、強壯なればなる程容易に肉體は服従する。總ての肉情は柔弱な身體に宿る。肉情にして戟發され易ければ易い程満足を得ることが尠い。

如何に情は我等を輕信ならしめるか。又惡に染んだ心がその過失を認めてさへもそれを棄てることは如何に困難であるか。

我々は數年にして老年と爲ることが出來、又價を拂つて莫大の經驗を收め得ることが出来る。情は斯くして哲學に導くと云はれるのであらう。

我々の與かる情は我々を誘ひ、我々是我等の利益に衝突する情を嫌忌する。而して情の感化より起つた奇怪な謬論に因つて、我々は自分の模倣せんことを

望むものも、それが他人に有れば批難する。

感性は我々の總ての情の源泉であつて、想像力は情の傾向を確定する。自己の關係を感知する總ての實在者は其關係の變化する時、又他に自分の性質に猶能く合致するものゝ有ることを想像し、若しくは考へる時には、此等の境遇の影響を蒙らざるを得ない。誤つた想像は總ての愚鈍な實在者の情を罪惡に變せしめる。天使にして情慾を有するとせば其等の天使に對してさへ然うである。

何故なれば如何なる關係が此等の實在者に最も適合するかを判斷するには、總ての實在の性質を知る必要が有るからである。情の使用には人類の總ての智慧の概略が含まれてゐる。第一に、各個人としての人間の眞の關係、並に種族としての人間の眞の關係を理解し、第二、種々の關係に隨つて心霊の總ての性癖を仕向けるといふことである。

幸福

ルツ - の眞髓

我々は純粹の幸福若しくは純粹の不幸を知らない。此人生に於けるものは總て混合されて居る。我々は混合物無くしては幸福を味ふことは無い。我々は同一の状態に於て二分間も靜止することが無い。我々の心靈の性癖は我々の肉體の改變と等しく、絶えず變動するものである。禍福は總て我々に共通である。唯其割合を異にするといふに過ぎない。最も幸福なる人とは苦痛を受くること最も尠い人である。最も不幸なる人とは快樂を享くること最も尠い人である。人に割り當てられた禍の割合は、人に割り當てられた享樂の割合を越して居る、而して此不權衡は全世界到る處に通ずる。それ故に人間の幸福は單に否定的であつて、苦痛の最も尠い量を以て評價せらるべき筈のものである。

總て苦痛の感覺はそれより脱せんとする希望を伴ひ、總て快樂の觀念は其享樂を永からしめんとする希望を伴ふ。總て欲望は缺乏を意味し、總て我々の熟知する缺乏は苦痛である。是れに依つて之れを見れば、我々の不幸の成立するのは、我々の能力と我等の欲望との不權衡に在る。能力と欲望とを均等に所有する賢い實在者は絶對的に幸福な實在者たるのである。

然らば、人間の智慧は何に依つて成立するか。又眞の幸福に至るの道は何處に在るか。それは、我々の欲望を全く削り去ることにあるのではない、何故なれば、若し我々の欲望にして我々の強さ以下であるとすれば、我々の能力の一部は發動しないからである、而して我々は我々の實在の總てを享樂しないからである。又それは我々の欲望を擴張することにあるのでもない。何故なれば、若し我々の欲望にして極限迄擴張されたらば、我々は唯一層不幸な者と爲るに過ぎないからである。我々の幸福と爲る方法は唯だ我々の能力以上に過大な欲

眞の - ツル

望を緩和するのに在る、即ち力と意志とを全く平等ならしめるのに在る。人の平調であるのは、唯だ、我々の總ての力は活躍し、心靈は平靜の状態に在る時のみである。

物を最も善く整へるのは自然本來の制規である。自然は人に對して直接、唯だ人の保存に直接必要な丈けの欲望を與へ、又此等の欲望を満足せしむるに必要な丈けの能力を與へた。自然は其他の總てのものをば、境遇に随つて押擴げられる様に人の心靈の底に潜めた。

力と欲望とが平衡を維持し、又人の不幸でないのは唯だ自然の此状態に於けるのみである。此等第二位的の假定的の能力が活躍するや否や。此等總ての中の最も活潑なる想像力は直に振起されて此等總ての上に拔んでる。

善にもあれ惡にもあれ、その可能の範圍を人に展開するものは想像力である。又欲望を満足せしめんとする希望を以て我々の欲望を絶えず刺撃し發育せしめ

るものは想像力である。然し最初には手近く到達せられるやうに見えた對象物は、我々が是れを追及することが出来ない様に速く我々から逃れて行く。我々が此對象物に到達せんとして居ると想ふ時には、その對象物は外見を換へて我々の把握を逃れ、我々の進むにつれて尙も退却する。我々は旅行し來つた國が見えなくなる時には、其國を忘れるが、我々の猶旅行す可き所は絶えず自ら展開して擴張して居る。斯くして我々は旅行の終極に達すること無くして自己の力を消耗するのである。我々にして欲望を充せば充す程、夫れ丈け幸福は我々から逃れ去る。是れに反して、人にして元始的の状態にあることが多ければ多い程、夫れ丈け其人の能力と欲望との懸隔は益々少ない。勿論其人と幸福の距離も益々少ない。人は總ての物を剝奪された様に見える時のみが不幸なのではない。何故なれば不幸は事物の褫奪に依つて成立するものではなくて、唯だ我が事物の缺乏を感じる苦痛に於て成立するものであるからである。

實在には限り有るも、理想は無限である。我々は、或る物を擴張することを得ない場合には、他のものを縮少せしめよ。何故なれば我々を眞に不幸ならしめる禍は皆唯だ此等の間の懸隔から生ずるが故である。

健康と強さと、良心の證據とを取り去れ、然うすれば此人生の幸福は單に机上の説に於て存在するだらう。肉體の疾病と良心の苦悶とを取り去れ、然うすれば他の總ての害悪は架空的となるだらう。

總ての動物は恰度自己の保存に必要な丈けの能力を有する。唯だ人のみが或る過多のものを授けられた。此過多なものが人の不幸の道具であらうとは、驚く可きではないか。總ての國に於て人間の手腕は、人間の衣食に必要な以上に打ち勝ち又仕遂ぐることを得しめる。若し人が贅澤なものに何等の價値も附せない程賢明であつたならば、彼は常に必要なものを持つてゐたであらう。といふ譯は、人は決して何物も多く持ち過ぎるといふことがないからである。

フアヴォリヌスの言ふところによれば、我等の最大なる欲求は大なる富から生ずる。そして其の欲求を満足せしむる最善の方法は、往々我々の所有物を減少することである。我々は、絶えず幸福を増加せんとして、却つて自らを不幸ならしめると。誰れにても、唯だ生きんことのみを欲する人は幸福に生活し、又必然に有徳なる生活を爲す。といふのは、然うなつた場合、其人は不善であることに何の利益も見出せないからである。

眞に満足した心の最も眞實な表現は、退隱した家庭生活に在る、而して絶えず幸福の追及に戸外を漂泊する人々は、決して家庭に於て幸福を見出さないといふは疑を容れないことである。

我等は餘りに外見から幸福を判断し過ぎる。我々は幸福の殆ど存在することのないやうな處に幸福を尋ね、幸福の見出さる可からざる所に之れを求め。歡樂は甚だ曖昧な幸福の印である。陽氣な人とは、多くは他人をして己れの状

態と同等ならしめようとし、又己れ自身を忘れようとする不幸な輩に過ぎない。人々と一緒に居ては活潑であり、自由であり心安い人々も、家に在つては大抵陰氣で機嫌が悪い。而して其婢僕は此等の人々の社會に與へる娛樂に對して高い價を支拂ふ。

眞の幸福は陽氣なものでもなければ、遊戯的なものでもない。我々は斯様な快い感じを妬む。とは云へ我々は、その眞の幸福を玩味し、之れに就て考へることを欲し、之れを享有することを好み、又之れを失はんことを恐れる。眞に幸福な人は物事云ふことも尠く、笑ふことも尠い、彼は幸福を其心胸の周圍に捲き付ける。喧しい娛樂と騒々しい歡樂は嫌惡と倦怠を覆ふ。然し憂鬱は快樂の友であつて、涙と柔和とは最も上品な樂を伴ひ、過度な歡喜は哄笑を起すよりも速に涙を催す。

種々の娛樂は一見して幸福に貢獻する様に見え、又退隱生活の千遍一律の一見して倦怠して見えるが、更に近寄つて見る時には、却つて、心靈の最も心地好い習慣は、殆ど欲望若くは嫌惡を起す餘地のない、適度な樂しみに於て成立するといふことを發見する。欲望が止まるを知らなければ好奇心と移氣とを來らす。騒がしい歡樂の缺陷は倦怠を生せしめる。

我等にして眞に歡樂を望めばそれを享くことが出来る。總ての物を困難ならしめ、我々の前から幸福を追ひ去るものは小理窟のみである。幸福に爲ることは幸福に見えることよりも、遙に容易である。

幸福に到る路は徳を通じて行くものよりも確なものはない。若し我々にして徳に因つて幸福に達するならば、徳は幸福を一層純潔にし、一層堅實にし又一層完全にするだらう。よし我等は幸福を失ふとも、徳のみはそれを補ふことが出来る。

酒色に溺れて無分別に苦痛を倍加する人々は如何に反省することが尠いので

眞髓のルツ

あらう。若し我々にして斯様な言ひ振りを許されるならば、此等の人々は自分の存在を地球の面に展べ擴げてその存在を滅し、數多い愛着の度數に因つて自分の鎖の重量を増加するものである。彼等は一の快樂をも享けないで快樂の裾に百千の苦しい艱難を包む。彼等の感ずることが多ければ多いたけ、夫れ丈け彼等は苦痛を受け、彼等の生活に没入することが深ければ深い丈け、夫れ丈け彼等は艱難の中に沈むのである。官能に倚るものは總て、生活に必要でないものと雖、慣習と爲る時には其性質を換へる。而して絶對に必要となる時には最早快樂でない。是れ即ち自由意志の鎖を以て自己を束縛し、同時に又快樂を取り去られる苦痛に已れを委ねるのである。

絶えず我々の欲望に備へるのは、欲望を満足せしむる途ではなくて、欲望を撲滅するものである。此迄に我々の目指す可き一層尊いものが有る。それは我等の主と爲す、我等の情を從順ならしめ、又我々の總ての欲望を取縮るべきものである。

是れは幸福になる新しい方法である。何故なれば苦痛無くして我々は何物をも失ふことを得ず、憂慮なくして何物をも享有することを得ざるが故である。若し又眞の幸福は賢い人に屬するものであるとすれば、それは其人が運命の總ての攻撃に對して堪へるといふのである。

總ての征服者は殺されたのではない、總ての横領者は失敗したのではない。俗惡の偏見を以て先入主となつた心には幸福に見ゆるものが多いであらう。然し唯だ外見のみを注意するのでなくて、心の状態から人を判断する者は、その人々の成功した時にも其不幸を認め、又其人々の欲望及び漸次浸蝕する憂慮が財産と共に擴張増加することを見るであらう。又彼より見れば、人々は永久に其野心の終に達することが無く、其道程を進むる毎に呼吸を失ひつゝあるであらう。又彼より見れば、彼等は始めてアルプスを横斷する旅行に上つた無經驗

ルツの眞髓

ルソウの眞髓

の旅行者が、山毎にそれを最後の山だと考へ、その頂上に達したる時には、尙も其前に一層高い山の在るを見て失望するやうなものであらう。神でなくて何事をも爲し遂げることの出来る人が有れば其人は不幸な人であらう。といふのは然ういふ人は願望の快樂をも失ひ、又此他の如何なるものを取り去られても猶忍ぶことが出来るからである。それ故王公が無限の權力を渴望するのは何の職業も無く倦怠して死する名譽を渴望するやうなものであると云はなければならぬ。若し汝にして世界の各君主國の中に最も疲れ倦ぐんだ人を求めるならば、汝は先づ常に君主に赴け、専制政治の君主であるならば殊に然うである。斯くも多くの不幸な人々を作るとは専制君主國も却々價值のあるものである。彼君主はこれよりも少い犠牲を拂つたのでは自分を倦怠の不幸に委ねる手段を見出すことが出来なかつたのであらうか。

乞食は常に乞食であるが故に不幸である、國王は、常に國王であるが故に不

幸である。何れへでも是等よりは猶容易く變更することの出来る中流社會にはその力の及ぶ範圍に於て歡樂が有る。中流社會は猶多くの偏見、猶多くの比較點を發見して、人々の智識を擴張する。是れが最も賢明にして最も善良な人々の一般に中等社會に存在するといふ重要な理由である様である。

我々は何を爲す可きであるかそれを知らない以上は、我々の働かないのであるのは最も賢しい。これは總ての格言の中で最も人に必要なものであつて、而も又如何に是に隨ふべきか、餘り人の知らぬ格言である。何處に幸福を見出す可きかを知らないで、妄りに幸福を尋ねるのは、幸福を行き過ぐるといふ危険を冒すものである、而して幸福に至る途には迷ひ路が多いが故に是れ亦反對の危険を夫れ丈け多く冒す譯である。然し人々は皆悉く働かないで居る方法を知つて居るといふのではない。

我々が幸福の探求に熱中する時には、幸福を追求もしないで坐してゐるとい

ルソウの眞髓

ふよりは、寧ろ幸福を追及して途に迷ふ危険を冒さうとするのが常である。而して幸福を見出したかも知れないやうな所を行き過ぎた時には、其處に立ち歸る方法を知らないのである。

幸福の根元は全然欲望の對象物に存するのでもなければ、又幸福を所有する胸中に存するのでもない。唯だ兩者相互の和合に存するのである、而して總ての對象物が皆幸福を生ずると云ふ譯でない故に、心は常に幸福を享有する状態に在ると云ふ譯でもないのである。若しも最も純潔な心靈、又は最も善良な良心が夫れ自身を幸福ならしめるに十分でないとすれば、況んや此世の總ての快樂のみでは墮落した心を幸福ならしむることの出来ないことは疑を容れざることである。何故なれば雙方に或る必要なる準備を要し、而して、總ての賢き人の極めて熱心に追求する此貴重なる感情は即ち幸福は福と對象物の善き結合より生ずるが故である。而して似て非なる哲學者輩は常に是れに就て知つて居

らぬ。何故なれば彼等は永久的幸福に就いては何等の知る處がなく、常に刹那の快樂を追及して居る故である。

人よ。若し汝は賢く幸福に生活せんと望むならば、唯だ汝の心を消ゆることの無い美にのみ結び付けよ。汝の境遇をして汝の欲望を取り締らしめよ。汝の義務をして汝の偏向に先立たしめよ。必要の法則を道德の法則に迄擴張せよ。

汝より取り去り得可きものを失ふことを學べ。汝は徳の要求する時には、何物をも棄つることを學べ。即ち偶發の事以上に汝自身を置くこと、悲歎せずに分の最も貴重なりとする如何なるものよりもその心を離すことを學べ、又汝は決して不幸なことの無いやうに逆境に於て堅忍ならんことを學び、決して罪なからんが爲めに義務に於て堅固ならんことを學べ。斯くの如くすれば汝は運命の如何に拘らず幸福になるだらう。又情の如何に拘はらず賢明になるだらう。其時こそ汝は一時的に過ぎない幸福を所有してもその中に快樂を見出すだら

ルソウの眞髓

う。そして其幸福は何物も之を攪すことが出来ない。何故なれば幸福は汝を所
有しないで、汝は幸福を所有するからである。又汝は、總ての幸福に通げ去ら
れた、人が唯だ如何にして其幸福を失ふか知つてゐるといふことを喜んでゐる
のを感じるであらう。眞に汝は架空的の快樂によつて欺かれず、又架空的の快
樂より生ずる苦痛をも感じないであらう。此交換に依つて、汝は大なる方を得
たるものならん、何故なれば、空想の苦痛は頻繁であつて而も現實であるが、
空想の快樂は僅であつて、而も不満足であるからである。汝は斯く多くの妄説
に打ち勝つた時、又人生に斯く大なる魔力を與ふる所のものをも征服するだら
う。汝は苦痛も無く、不幸も無く生涯を送り、又恐れ無くして生涯を終るだら
う。云はゞ汝はあらゆる物から自分を離すだらう。他の人々をしてその生涯を
脱する時に自分の存在は此處に終るといふことを、恐怖心を以て思はしめよ。
汝は自分の神に従屬してゐることを感知する故に、その生涯の終りは唯だ將に

黎明にあるのだと信するであらう。死は悪人の生涯を終へるけれど、正しき人
の生涯を始める。

ルソウの眞髓

徳

徳と云ふ字は堅忍と云ふ字から出て居る。堅忍は總べての徳の基礎である。自己の愛情に克つことを知る人は有徳の人である。

徳は唯だ性質の弱い、情慾の強い人にのみ屬する。正義の士の功績は此處に成立つ。

大なる徳の實行は天才を高め且つ之れを養ふ。社會的徳行の履行は我々の胸に人道の愛を深く印象する、何故となれば善を行ふことによつて我々は善と爲るのであるからである。私は是れ以上の善い仕方を知らない。

或る種の人々は他人を變化して自己と同じもの爲らしめる。此等の人々の行動の範圍には不可抗の感化力が有る。我々にして沈思すれば、此等の人々に倣

はんとする希望を感ぜざるを得ない。又此等の人々は其卓越した所から、其の周圍を取り巻く總てのものを引き付ける。

徳を棄てることは我々が想像する程容易なものではない。徳は己を見棄てた人々を永く苦悶させる。そして純潔な人々の主なる歡喜である徳の魅力は、徳を愛しては居るものゝ、最早徳を享有することの出來ない悖徳の人々によつては、最大の苦痛である。

我々にして眞正の徳を棄てた時には、一種の自作の徳を以てその代りと爲すといふ程に、徳は我々の心に必要なものである。而して我々は猶強く此自作の徳に執着する。是れ恐らくは我々が自ら選んだものなるが故であらう。

若し我々の徳に捧ぐる犠牲にして往々苦痛であるとしても、其追想は常に愉快である。而して善き行を爲して誰れも悔いた例がない。

一度汚れた心は、永久その汚れたまゝの状態を維持して、再び自分を徳に歸

徳の眞髓

することがないであらう。或る意外なる變革、運命と地位の或る急速の變化が直ちに其心の和合を更へて、其心に初の状態を強ゆるのでもない以上は、又其心の總ての習慣が壓服され、心氣一轉して、其心が其元始的の品性を採り、新に自然の手から來た他の實在者のやうにでもならない以上は。

我々が徳に歸つた時には、その時こそ我々の前の卑しかつた回顧は、我々の再び邪道に陥ることを防ぐ用を爲さう。昨日、我々は下劣にして弱くあつた、今日、我々は強くして豪壯である、と斯う我々は、自分を斯くも相違した兩方面から考へる時、自分の恢復したもの、價値を一層能く感知し、又その恢復したものに適はしい品性を維持せんとして一層注意深く爲る。

徳の樂しみは全然肉적であつて、單だ之れを感知する人にのみ認められる。然し惡の總ての優勢な點は人の目を驚かす。それ故唯だ惡の力に拂ふことの如何に多いかを知る人のみが徳の樂しみを持つて居る。惡の力と徳の力に關して

誤つた判斷の生ずるのは、恐らくは此事情の爲めであらう。

如何に戦ひ如何に勝つべきかを知るのは、唯だ精神の強い人のみである。總ての偉大な努力、總ての卓越した行は皆根氣に基く。理性が冷靜であつても、それだけでは嘗つて何等の目醒ましい事も爲したことが無い。我々は情慾を互に對抗させることに依つてでなければ、決して情慾に勝つ事が無いだらう。徳の情緒が喚起される時には、その情緒が主權を握つて總ての情緒をして平衡を保たせる。眞に賢い人は斯くして己を持つる者である。假令賢い人は情慾に對しては他の人々よりも安全でないとしても、彼のみは恰も善き水先案内者が相反する風の間を安全に進ましめるやうで、情を互に對抗させることを知つて居る。

徳は交戦國のやうなものである。其所に棲むには絶えず自分と戦はなければならぬ。だから人生が快樂の爲めに短いとすれば、同様に徳の爲めにも永くは

眞のソル

ない。そして徳の命令には我々は絶えず注意を向けて居らなければならないのである。

享樂の刹那は過ぎ去つて復び歸らない。然るに惡を爲す刹那は過ぎ行くけれども絶えず歸る。若し我々にして一刹那に自分を忘れるならば、我々は永久に失はれるのである。

似て非なる羞恥心や批難を恐れる心やは、善行を鼓吹するよりも惡行を鼓吹する。然るに徳は唯だ眞に惡しきこと以外には決して恥ぢない。

世には、哲學を以て誇り、規則に依つて自分は有徳であると思ふ人々がある。然し是れは單に其人の體質に依つて然うであるに過ぎないのである。人々が自分の行ひを庇護するストイツクの外飾は、畢竟人々自身の心の好むものに立派な理窟を附けて裝飾するに過ぎないのである。

義務よりも生活に執着する人々は如何なる人と雖も、眞に有徳であることが

出来ない。善良な人は人生の重荷を喜んで支持する。善良な人は、未來世に於ては有徳な者にのみ報いがあるといふことを感じる。然るに智慧の淺薄な惡人は決して之を信じない。

徳から取り離されるよりは、高位から取り離される方がましである。それ故鑄掛屋の妻は公爵の私妾よりも尊い。

自分の近侍に英雄に見えた人がないと云はれてゐる。それは然うかも知れない。然し正しい人は侍者の尊敬を受ける。是即ち剛勇は單に虚偽的であつて、徳以外には世に何等の堅實なものも無いといふ明かな證據である。

徳は消ゆることのない、又計り知ることの出来ぬ美しい魔力である。名譽は博しても快樂の懷に惑溺してゐる惡人を、我々は決して羨まない。我々の羨むのは薄命ではあるが徳の有る人である。何故なれば、我々は不幸の外觀の下に隠れた眞の幸福を胸の底に於て感知するからである。是れは總ての人々が悉く

知るところの情操であつて、それは往々知らざらんと欲するも知らざるを得ないものである。我々が胸中に携へてゐる此神の像は、我々の作つたものでもなければ、自ら選んだものでもないとはいふもの、此像は我々を總て楽しませる。誰れも深く考へれば、此像の如くならうといふ希望を感じる。最悪人と雖も、現在の自分を改造することが出来たならば、必ず善人と爲ることを望むであらう。

隠れた徳は卓越すればする程、世人の喝采を熱望しないで、唯だ自己自身の善い証明を以て満足する。そして正しい人の良心は全世界の稱讃に匹敵するのである。幸福は賢人の財産である。徳が無ければ幸福も無い。

名 譽

我々は所謂名譽なるものを分つて、公共の意見に依るものと、自重心より出たものとの區別することが出来る。

公共の意見に依るものは、淺薄な偏見から成り立つものであつて、掻き擾された水よりも猶多く波動する。自重心より起つたものは道徳の永遠の眞理に基く。世上の名譽は我々の運命に利益があるかも知れない、然し決して心靈に達するものではなく、又我々の眞の幸福に何等の影響も與へるものではない。是れに反して眞の名譽は幸福の本質を形成して居る。何故なれば我等がこの眞の名譽に於てのみ内心の満足の永久的の感覺を見出す故である。そして唯だ此内心の満足のみが思考力有る實在者を幸福ならめることが出来るのである。

貞操と潔白と羞恥心と

ルツの眞髓

貞操は、心の氣高い良婦人に取つては、寧ろ喜ばしい徳である。斯くの如き女子婦人は世人の稱讃を博し、總ての人々を征服し、亦自己自身をも征服する。又自己の胸底に玉座を建設し、人々は悉く來つて之れを禮拜する。男も女も、優しき者も嫉み深き者も共に等しく此種の婦人に對して尊敬の念を捧げる。世間も尊敬する。其婦人自からも自己を尊敬する。斯くて此婦人は單に數分間の争に勝つた爲に、永久に榮譽を荷ふのである。争の苦痛は一時的であるけれども、其報酬永久的である。

徳の誇りと美との結合せるものは、偉大な心の人に取つて何たる樂みであらうぞ。先づ心中に小説的女傑を描いて見よ。其女傑はラーセツスやクレオパトラよりも猶麗はしいものであらう。そして其女傑の美が消え失せた時でも、尚はその榮譽と樂みとは殘存する。過去を樂むことを知る者は、此種の婦人である。

潔白は潔白によつて養はれる。常に欲望を壓服すれば、終に欲念が起らなくなる。反之若し誘惑に順へば、誘惑の魅力は倍加する。

偉大な心靈は總ての美德を生ずる。而て此偉大なる心靈は潔白によつて維持せらるゝもので、潔白は此等の總ての徳を養ふものである。

總て潔白を維持することを助けるものは、輕視してはならぬ。偉大な徳を保持せしむるものは、小なる用心ではないか。

欲望に羞恥心が加はると益々人の心を誘ふものと爲る。謹慎の力によつて、欲望を抑へようとすれば、却つて欲望が燃えて來る。謹慎から生ずるさまざまの恐怖や遁辭や控目や小心な自白や優しく故意とならぬ狡猾や、此等は慎し

貞操と潔白と羞恥心と

三一

ルツの眞髓

のない情慾よりも反つて速かにその隠さうとする所のものを暴露する。好意をして尊からしめ、拒絶をして忍び易からしめるものは羞恥心である。

眞の愛は唯だ慎謹の所有するものをのみ、所有することが出来る。心弱さと慎謹とが混すれば、眞の愛をして一層愛らしからしめ、又一層優しからしめる。好意の数が少ければ、反つて好意の價值は高まる譯である。そして是れが即ち愛は缺乏と快樂との何れをも享樂する所以である。

罪惡は、隠れやうとしても隠れ得ざるもの、罪ある人の額上に極印を押し付けるものである。鐵面皮といふことは女子の罪ある確な印である。何故なれば女子が赤面することの無いのは、其女子に赤面す可きことの餘りに多い爲に外ならない。そして若し貞節が失せた後にも、羞恥心が残つてゐる場合が有るとしても、羞恥心の失せた後に貞操が残るといふことはない。

可憐なる羞恥心よ。汝は愛の最も樂しき者である。女子が汝を棄つる時、如

何に多くの懐しさを失ふかを思つてみよ、女子若し汝の王國の廣さを知るならば、彼等は汝を保持せんが爲めに、如何なる苦痛をも忍ぶに違ひない。假令その動機が名譽心から出た動機でないとしても、少なくとも媚を失ふまいとする動機によつて、汝を棄てないに違ひない。然し乍ら、世に模擬的羞恥心といふものは有る筈がない。凡そ羞恥心を模擬するよりも滑稽な策略は、世にないのである。

憫みの心と敏感さ

ルソーの眞髓

憫みの情は、最も一般的な最も有用な最も自然な徳であつて、それは反省によつて始めて生ずる體のものではない。動物も亦屢々憐みの情あることを示してゐる。彼の『蜜蜂の話』の作家が、人類は生來同情と感性とを十分に保有するものであるといふことを我等に認めしめたのは喜ばしいことである。彼は例の小器用な、冷淡な文體を變へて、牢の外で瘁猛な動物が赤子を母の懷から奪ひ取つて、残忍な牙を以て赤子の手足を喰ひ、爪を以て心臓を裂ける有様を書き、又牢獄の中から此有様を見た時のいたましい心持を書いてゐる。假令牢中に在る人の身は此有様と何の關係もないにしても、斯の如き怖しき有様を見る人の感情、掻き擾された心は、どれほど怖しいものであらうぞ。且又、氣絶した母

や死に瀕した小兒に、何の救助も與へ得ないことを知つて、彼はどれほど苦悶したであらうぞ。

マンデヴィルは言ふ、『若し自然が人間に理性を保持する爲めに人情を與へなかつたならば、人間はどれほど道徳を有するとも、依然一種の怪物たるに過ぎなかつたらう。』と。至言と言ふべきである。けれども彼れは社會的美徳の存在を駁論した。そして此等のものは皆此の人情から出て來た物であるといふ一事に想ひ到らなかつた。此點は全く誤つてゐると言はねばならぬ。弱きもの、罪有るものに對する憫みの情、人類一般に對する憫みの情、この情がなかつたならば、寛容とか仁慈とか人情とかの起らう筈はないではないか。仁慈とか友情とかと言ふものでも、或る特殊の人間に對する憫みの情の結果ではないか。人間の苦悶を救つてやらうと望む心は、取りも直さず人間を幸福にしてやらうと望むに外ならぬではないか。

ルソウの眞髓

他人の不幸に對して感ずる憫みの情は他人の苦しみに比例するものではなくして、苦悶する當人に對して我等の懐く感じに比例するものである。

我等が不幸な人を憐れむのは、其人こそ、憫れむ必要があると考へるのに比例してゐる。随つて憫れむ必要がないと思へば、最早人の運命に對しては無感覺となる。富者が、貧者をば困苦を感ぜざる程愚鈍なものであると假定するが故に自ら貧者に不幸を齎らしても尙且つ良心の苛責に堪へ得るのである。或る人が同胞を如何程尊重してゐるかといふことは、即ちやがて其人が如何に多く同類の幸福を重じてゐるかを示すものである。輕蔑して居る人の幸福に對して我等の冷淡であるのは自然の勢である。又自己を自己よりも猶憐な人々の地位に置くといふことは自然であるけれども、自己より幸福な地位に置くといふことは人の自然ではない。

自分が決して受けることが無いと思ふ不幸に對しては吾々は冷淡である。

Non ignora mali miseris succurrere disco.

不幸とは如何なるものなるか、我れこれを知る、不幸なる人の憐れむべきは、我之を學べり。

爾の眞髓

余は此句程美しく、崇嚴で、ゆかしく且つ眞理なるものを知らない。何が故に國王は其臣下を憐れまないのか。人の下に立つことがないと想つてゐるからである。何が故に富者は貧者に對して冷淡であるのか。自分が貧者となる恐れは無いからである。何が故に貴族は平民を侮蔑するのか。平民と爲る恐れがないからである。何が故に土耳其人は、一般に我等よりも能く人を遇するのか。是れ彼等の政府は、全く暴虐であつて、私人の財産を常に勝手にするが故である。彼等は世の如何なる屈辱艱難をも、彼等に無關係なものと思はさるゝが故である。今日は人の身の上と思つてゐることも、明日は我が身の上と爲り勝たからである。

他人の不幸に對して相當の憫みを懐く爲めには、永い間不幸に苦しまないま

でも、少くとも不幸の何たるを知らなければならぬ。

苦痛を受けたことが有るか、又は苦痛の味を知つてゐれば、他人の艱苦をみれば之を憫むけれども、自ら苦痛を受けてゐる間は、單に自己を憫むのみである。そして何人と雖皆人生の禍を免れ得ないが故に人は皆自己を憫み、唯だ其の殘餘の憫みで他人を憫むのである。従つて人を憫むのは我等が甚だしい不幸でないといふ證據であるから、憫みは甚だ快き情でなければならぬ。是に反して、不人情な人の胸中には、他人の不幸に與へるだけの餘分の感情がないから、彼等は常に不幸な人に相違無い。

斯く同情は人情第一の關係的社會的愛情である。然し總ての人は同情を同等に與へられてゐるのではない。同情を喚起する印象には種々の變形と種々の程度とが有り、且つ是れ等は各自獨特な品性と習慣とに倚るものである。世には一般的ならぬ感情、眞に敏感な人にのみ屬する感情がある。道徳的苦悶から生

ずる感情、内心の悲痛、悲哀及び憂愁から生ずる感情の如きは即ち是である。

悲鳴や涙には感動するが然し艱難に壓倒された人、胸中に隠れた悲痛を懐いてゐる人に對しては歎聲を漏すこと無く、又落膽せる容貌や、青ざめた顔色や若しくは泣き盡して眼の眊んでゐる人に對しては、少しも同情の涙を流さない人がある。心の苦痛は、此等の人に對しては何でもないやうに思はれる。そして彼等は苦痛を感ぜざる己が心を以て此等の苦痛を評價する。斯る人からは、一徹な嚴酷な無情無慈悲な言葉より外は何事をも期待することを得ない。假令彼等は誠實公正であつても、情深く寛容で同情に篤いことはない。誠實であり得るか何うかも疑はしい。なせかと言ふに、同情心がなしに誠實であるといふことが可能か何うかは、甚だ疑はしいからである。

憫みは快き感情である。何故なれば自分が苦む人と地位を換へて、自分は彼等の如く苦しんでゐないといふ歡びを感ずるが故である。

嫉妬は不愉快な感情である。何となれば、幸福な人を心に念ふといふことは反つて自分と其幸福な人との距たりを遠くして、自分が幸福な人の地位に居らぬといふ遺憾を感じるようになるからである。

同情は我等を他人の不幸から逃れしめるもの、嫉妬は我等を他人の悦びから排斥させるものである。

憫みの心が、柔弱に墮落することを防ぐ爲めには、之を一般的とならしめ、之を總ての人類に擴めなければならぬ。さすれば、正義は一致する程度迄憫みに順ふことが出来る。正義は總ての徳の中で人類の公益に最も多く貢獻するものである。理性と自愛との雙方からして、我々は隣人を憫れむより人類を憫まなければならぬ。悪人を憫むは、人類に對する大なる無慈悲ではないか。

愛 國 心

徳の最大なる奇蹟は愛國心に依つて生せられた。此活潑な愉快なる情操は、自愛心の力と光輝燦然たる徳とを結合させる。又此の感情は自愛心に力を與へる。此情操は自愛心の形を破ること無くして、自愛心をして總ての情慾の中で最も勇ましいもの爲らしめる。我等の弱い視覚を眩惑せしめるほど光輝燦然たる不滅の行を斯くも多く生み出し、又偉人を斯くも多く生み出したものは、是れ即ち愛國心である。此等偉人の元始的な徳は、愛國心を嘲弄する現今から見れば偶然の如くに見ゆるほど大なるものではないか。然らば何故に愛國心は我等を驚かしめるのか。すべて感情は何によらず之れを感じたことのない人には妄想の如くに見える者である。随つて我等が情人に對して感ずるより幾千倍も

快い愛國心も、單に之れを感じたことの有る人にのみ考へられる。けれども愛國心の勵ました總ての心情に於て、愛國心の靈感せしめた總ての行に於て、我等は熱烈にして崇高なる愛國心の表出を認めることが出来る。而して此熱烈にして崇高なる表出は、最も純潔なる徳も愛國心無ければ爲すこと出来ぬものである。

ソクラテースとケートーとを比較してみよ。前者は哲學者であつて、後者は市民であつた。アゼンスは已に滅びた。そしてソクラテースは廣漠たる世界を國とする人であつて、それ以外に國を有しなかつた。然るにケートーは、其胸の底に自分の國を携へてゐた。彼は唯だ自國の爲めのみに生きた。随つてその國の滅びると共に、彼の名も滅びてしまつた。ソクラテースの徳は最も賢き人の徳である。けれども亦ケートーをシーザー若しくはポンペーと比較してみれば、其所に神と人との相違がある。

シーザーやポンペーは僅かの個人を教へ、詭辯家に反對して真理の犠牲となつただけである。然るにケートーは國と自由と法律とを護り、彼の仕ふべき國なきに至つて始めて世を去つたではないか。ソクラテースの高弟は、當時に於ける最も有徳な士となつたに違ひない。ケートーの勁敵は、當時に於ける最も偉大なものとなつたに違ひない。前者は自己の徳の中に自己の幸福を見出し、後者は人類總ての幸福の中に自己の幸福を求めたのである。我等は前者に訓へられ、後者に導かれ度い。而して兩者の何れを選ぶが正當であるかといふことを決定するには、是れで十分である。何故なれば、國民全體を哲學者たらしめることは不可能であるけれども、民衆全體を幸福ならしめることは不可能でないことは明かでないか。

人民を有徳にするには、先づ愛國心を靈感せしめなければならぬ。けれども若し彼等の母國が彼等と外國人との間に何の區別も立てず、何人をも阻まざる

特權を彼等に與ふるだけであつたとすれば、どうして彼等は其國を愛することが出來ようぞ。若し彼等が民法から何等の保證も受けず、又法律を頼みにすることも出來ず、彼等の財産や生命や自由が強者の好むが儘に委ねられるとすれば猶更のことである。斯くの如く政府の義務には服従しながら、自然の權利は剝奪せられ、自己自身の防禦の爲めに自己の力を使用することを許されないとすれば、彼等は自由な生物の居所としては最も悪い地位に生存してゐることを發見するだらう。母國と云ふ字は、彼等に取つて唯だ厭ふ可く若しくは嘲笑すべき意義を有するに過ぎなからう。

人情と慈悲

人間は深切でなければならぬ。これが人間第一の義務である。總べての階級の人、總べての年齢の人、及び人に關係有る總てのものに對して、深切でなければならぬ。人情がなければ、智慧があつても何の益があらう。人間を幸福ならしめる機會といふものは、一般に考へられるよりも其數が少いのである。一度此機會を閑却すれば、其罰として再び此機會に遭ふことが無い。そして此機會の利用如何は、満足若しくは悔恨の情を永遠に我等に残すものである。

不幸な人の要するものは、唯だ金錢のみではない、唯だ財囊のみを以て善を爲すことを知る人は、怠惰な慈善家である。富を與へずして貧者を救ふ慈悲の手段は、慰藉、相談、心配、補助及び保護等其數が多い。或者は不幸を知らせ

る方法を知らぬが故に、唯だ抑壓されてゐるではないか。彼等は思ふことを言へない。理由を十分に説明することが出来ない。偉人を訪れる術も知らない。それで彼等は心許ない日を送つてゐるのである。此際公平な徳行家が立つて、勇猛に彼等を助けてやるならば、幾多の障害物を取り除くことが出来るではないか。又正直な人がその雄辯を揮へば、横暴極まりなき虐政をも恐れしめることが出来るではないか。諸君若し眞に入たらんと欲するならば、すべからく人情を學ばなければならぬ。人情は清く美しい水の如く、卑い地を肥沃にし、常に水平を保たうとし、又乾燥せる岩石を避けるものである。乾燥せる岩石は國土を脅かし、有害な蔭を作り、物を汚蝕する一種の光輝を放つて其附近を破壊するものに過ぎぬではないか。

善き心情を有する人をして野心家の傳染を受けさせまいとすれば、その人に絶えず善行を實行させるのが一番宜い。他人の不幸を憐む優しい情は我等を助

けて不幸の源を發見せしめ、又不幸を醸した害惡を防がしめるものである。

神が人間の祈願を聞届け賜ふとすれば、それは必ず純朴な感恩的な人が心秘かに求めてゐる祈願を聞き届け賜ふに相違ない。諛者や卑劣漢の欲してゐるものを聞届け賜ふことは決してないだらう、善人は之を思つて安んずる事が出来る。

謀反人や悪黨のみが住んでゐて、慈み深い人の心を動かすに足るべき物の殆んど無いやうな都會に於ては、慈み深い心を満足せしむることが出来ない。同情があつて慈み深い人が不幸の中に在つて幸福であることこの出来ないのは、恰も心の直しい人が放恣邪僻の中に處して常に汚るゝことなく其徳を保持することの出来難いのも同じである。

此種の人、自分の慈みによつて和げ得べき不幸を避けて自ら満足することはない。斯くの如き人は、不幸な人を救ふ歡びを味はんが爲めに寧ろ不幸な人を求める。斯くの如き人を惱ますものは、不幸の光景に非ずして不幸の存在で

ルソ-の眞髓

ある。彼等は、憐れな光景が眼前にないからと言つて、自から満足して休むことではない。不幸が全く存在しなくなるまで、少くとも自分の近くに不幸がなくなるまで安心しない。爲すべきの善有り、盡すべきの國有り、慰むべきの不幸有る間は、善人は閑暇を誇ることが出来ぬ。

慈み深き人の要求は第一の要求であつて、畢竟最も心を動かさしめる要求なるが故に、日用品を缺ぐ人のある間は、正しい人は何人も有り餘るものを所持することが出来ぬ。

慈み深い人の有り難みをしみじみ感ずる者は、唯だ不幸な人々のみである。

不感謝

私心を夾む恩恵が斯ほどに遍ねなくなつたなら、不感謝も亦斯ほどに頻繁でなかつたに違ひない。自分に善を爲してくれる人を愛するは極めて自然の情操である。假令私心は人の心情に不自然であるにしても、感謝は人の心情に自然である。恩恵を與へる人の私心を夾むよりも、恩恵を受ける人が感謝しない場合の方が遙かに尠いのである。

物を人に買ふならば、相當の値段を拂つて之を買はふ。けれども後に言ひ値通りに賣らんが爲めに、先づ伴つて之れを與へるのならば、それは詐欺を行うたのである。心情は唯だ心情によつて支配される。心情を束縛しようとしても、却つて之を自由ならしめるだけである。心情を自由に放棄して置くのは、却つ

眞の-ツル

て心情を拘束するに最も有効な方法である。

恩人に忘れられることはあつても、恩人を忘れる人はない。誰でも常に歡びを以て恩人のことを語らふものである。惠を受けた人は、愛情なくして恩人を考へることは無い。だから或る不測の要事が起つて、恩人に恩を記憶して居るといふことを表はす機會が見付つたならば、誰しも内心に非常な歡びを感じつつ、自己の感謝の念を満足せしめる。其時彼が如何ほどの歡びを以て彼自身を知らしめるかをみよ。如何ばかり恐悦して、「今こそ御恩報じの時が來ました」と恩人に告げるかをみよ。是れ自然の聲である。未だ嘗つて眞の恩惠は、不感謝の人を作つた例しが無い。

虚榮心

人間の行ひのうちには愚かなことも數あるが、然し大抵の愚事は、愚人ならざる限り癒すことが出来る。たゞ虚榮心だけはどうしても癒せない。虚榮心を療す薬は無い。若しあるとすれば、それは唯だ經驗のみである。虚榮心は困却の最大の源泉である。それは愉快の源泉となるよりも、苦痛の源泉となる方が遙に多いのだ。若し虚榮心が地上に幸福な者を作つたことが有るとすれば、其の幸福者は確かに愚物であつたに違ひない。

虚榮心は排斥と擇り好みとより外に何物をも呼吸しない。多量を強求して、何物をも與へない。虚榮心は常に不正である。

偽善

偽善は悪が徳に拂ふ尊敬である。それは、シーザーを刺さんが爲めに、彼の足下に平伏せるシーザーの刺客輩の如きものである。偽善といふ危険な面衣をまどうて、此刺客輩の如く墮落した人が隠れるのは、徳を尊敬するに非ずして、唯だ徳の旗印を濫用して徳に暴行を加へる爲に過ぎない。偽善は怯懦と詐りと其他總ての悪徳とを結合したもので我等をして永久に誠實に歸ること無からしめるものである。

大人物は、罪惡を犯すことがあつても、一種の偉大と寛容とは決して失はない。そして此偉大若くは寛容は、偉人の心に生動する天火の閃光である。然るに野鄙な追従的な偽善者の心は、死體の如きものであつて、その心裡に熱を見

ることも無く火を見ることが無く、生命に復る何の徴候をも見ることが無い。經驗に訴へてみれば解る。大惡漢が正道に歸り、神の如き行ひを行ひ、天に恵まれたといふ確信を以て死したものは珍らしくない。けれども偽善者が正道に歸つたことは未だ曾つてない。カーツエーシを改心させようとするのは可い。然しクウロムエルを改心させようとするのは、愚かな事である。

他人を善道に導く術を知つてゐる人は、唯だ善人のみである。偽善者は徳の聲を借り真似ることは出来ても、徳の趣味を他人に靈感せしめることはない。なせかと信ふに、若し偽善が徳の愛すべき事を他人に知らしめ得たとすれば偽善者自ら徳を愛するに相違ないではないか。

悪

總べて悪は柔弱から起る。小兒の不善なのは、畢竟その身體が孱弱だからである。身體を強くしてやれ、小兒は必ず善人となる。何事をも成就し得る人は何の害をも爲すことが無からう。萬能の神の屬性の中で、善は我等の神に對する觀念の最も缺く可からざるものではないか。古來善惡二元説を認めた人は悉く悪を善よりも劣れるものと做したではないか。又若し彼等が斯くの如く見做さなかつたとすれば、彼等の條理は立たなかつたのである。悪人は自分自身を恐れ自分自身から遁れる。彼等は自分自身を外所にして始めて娛樂を求めめる事が出来る。故に彼等は、不安相に對象物を自分の周圍に求め見廻はす、鋭い諷刺若しくは無禮な嘲笑を敢てしてゐるに非ざれば彼等は常に陰鬱である。愚弄

し嘲笑することが彼等の唯一の快樂である。是れに反して正しき人の内心は清朗である。その笑は惡意から出るのでなくて、喜びから出る。彼等は笑の根源を自己自身の中に携へてゐる。獨居の時も、仲間と共にゐる時も、常に愉快である。彼等は周圍の人々から幸福を奪ひ取ることをしないで幸福を人々に傳へる。

他人の情慾をみて激昂するものは、我等自身の情慾である。悪人をみて惡むものは我等の私欲である。若し悪人が我等に害を加へなかつたとすれば、我等は悪人を憎むよりも寧ろ彼等を憐んだに違ひないではないか。悪人は悪人自身に對して害惡を及してゐるではないか。吾々が忘れるのは、悪人が我等に加へる害惡の爲である。若し悪人が彼等自身の心中で如何に嚴酷に罰せられるかといふことを知り得たならば、我等は容易に悪人の惡を許すことが出來たに違ひない。我等は惡の害を感知するなれども惡の罰を見ない。惡行に依て得る利益

は外面に表はれるけれども、悪の生む苦痛は内心に有る悪行によつて樂まうとする人は、其成功しなかつたと同じ程の苦痛を受ける。対象物は變更しても、不安は變らないといふことでないか。

悪人は、富を以て世間を眩惑し、自己の衷心を隠さうと力める。然しこれは何の效もない。悪人の行爲は、彼等の意に反してその苦痛の例證を明示する。

然し悪人の心状態を研究する爲に、自から悪を爲すが如きことはしてはならぬ。回顧してみても自ら満足するやうなことを、自分は生れ甲斐がなかつたと想はれるやうなことを、全生涯に一度も行つたことの無い人があれば、其人は其人自身を知ることが出来ないのだと言はなければならぬ。どういふ種類の善が自分に適してゐたのかを感じる事が無かつた爲に、其人は永遠に悪徳ならざるを得ず、随つて永久に不幸であらう。

性 格

一見して相互の區別を見分け難いほど目立つた特質が無く、互に密接に相似てゐる人々が有る。斯く區別し難きが故に、淺薄な觀察者は此等の人々を平凡な者と誤る。然しながら此等の人々に區別を附くるを得ざること、及び共通の模型を表はしてゐるといふこと、これが取りも直さず此等の人々の性格を形成するものである。個性のはつきりした人といふのは、多くは此の共通の模型から何ものかを取り去つたものに外ならない。例へば、活版の校正刷にも各々其性質を標示する獨特の缺點が有ると同じで、若し完全に刷られた校正刷が有りどすれば其校正刷は一見して美しく見えるけれども然し之れを見分けるには、多大の注意を要するのである。

最も薄弱な情慾と雖も、之れに對抗するものが無い時には、如何にしても之れを壓服することが出来ぬ。冷かで不活潑な人の一大缺點は此處に在る。此等の人は、誘惑の起らない間何ごともうまく行くが、一度び誘惑に追及されれば彼等は攻撃を受くるや否や直に敗北する。理性と雖も、單獨に存在する時には最も瑣末な力にも對抗するだけの力を有しない。けれども自己の衷心に依頼せずして、自己の觀察に依頼することの多い鈍感性の人は、性急活潑若しくは誇張的な人々よりも、他人の情慾を能く判断することが出来る。性急、活潑若しくは誇張的な人々々は常に先づ自己を他人の位置に置くので、他人の感情を觀察することが出来ぬ。

單に善良な人は、其人が善を樂む間のみ善良である。情慾が激動すれば、斯の如き人の善は直ちに滅亡する。單に善良な人は、自己自身に對する時のみ善良であるのだ。

世には、早くから性格の顯著になる人がある。乳母の懷に抱かれてゐる間に既にその性質の明かになる人がある。此等は特別の種類に屬するものであつて當初から一種獨特なものである。ところが徐々に發達する小兒に關しては、我等は此等の小兒の本性を知る以前に、之れを訓練しようと試みることがある。

然しこれは、善い天性を汚損する危険があるものであつて、決して天性より善いものを以て此天性に更ゆるものではない。心意を變化するには、先づ心意の内部組織を變化する必要がある。性格を變化するには、性格の基本たる氣質を變化しなければならぬ。これは出来ることでない。狂暴な人が粘液質となり、無趣味な人忽ちにして想像力を得ること有るやうになつた例しがあるだらうか。これは黒を白に變じ、愚人を賢人に變じようとすると同じで、出来得可からざることであらう。随つて種々の性癖を一の共通模型に形成しようと試みるのは、徒勞でなくてはならぬ。性癖を制することは出来ても、性癖を變更する

ことは出来ぬ。眞の性格を暴露させぬやうにすることは出来ても、性格を變化することは出来ぬ。假令日常生活に於ては、其性癖を伴うとしても、重要な場合の生ずる毎に、生來の性格に復し、之に何等の抑制を加へることが出来ぬ。猶又事業は人の性格を變へ若しくは生來の性癖を抑制する力のあるものではなくて、却つて人の性格を進めるだけ進めるもの、性格を教化し、性格の墮落することを防ぐものである。斯くの如くにして、其人は天性の許すだけ完全となる。斯くの如くにして其人は教育に依り自然の働きを完成する。故に性格を教化せんとせば、先づその性格を攻究し、又性格の發展するまで根氣能く待ち、性格に其現はるゝ機會を與へ、又思慮なき働きをさせるよりは寧ろ常に働きを禁ずる必要がある。或る種類の天才には翼を與へ、或る者には足械を與ふる必要がある。一は勵まざる可からずして、他は抑制しなければならぬ。一は賞讃しなければならず、他は威嚇しなければならぬ。或人に對しては、知識を與へ

る事を力め、又或人に對しては知識の熟達を防がねばならぬ。或人は知識の最高の頂點迄達する様に教育せねばならず、他の人は讀み得るだけでも危険である。何れにせよ、理性の最初の曙光を待たねばならぬ。此曙光は性格を示し、性格に其眞の體形を與ふる者である。我等は此理性の曙光に依つて性格を教化する。理性の發達せざる時には教育の方法は無い。總べての性格は、夫れ自身では皆善にして又完全である。自然には、何等の誤謬有る事が無い。或る性質に固有であると云はれる總ての惡も、惡印象の結果に過ぎぬ。惡漢の偏向と雖も、善く仕向けられたならば、偉大な徳を生じたに違ひない。世に生來の惡漢はない。理解力は如何に弱いものと雖も、我等の採り様に因つては、夫れから或る有用な才能を引き出すことが出来る。それは恰も畸形にして不恰好なる體形も、適宜の見地に置かれたる時には、美しく能く調和して見ゆるが如きものである。

媚

媚の技術は、禮儀の技術よりも尙更察知力を要する。何となれば若し善く育てられた女子は誰にも無差別に丁寧にも立ち振舞ふものとすれば、禮儀にはそれで十分だからである。ところが、斯くの如き不器用な一様の行では、媚は直ちに其力を失つてしまふ。絶えず情人を皆感謝せしめようとするれば、其女子は總ての情人の感情を害するに違ひない。社交に於ては、總ての人々に丁寧な動作は、人々を個人個人に喜ばしめざることが無い。兎に角優遇されさへすれば、我等は細密に等差を検査することはない。然るに戀愛に於ては、他を排斥せざる愛は感情を害する。感情の人は、多くの人々と同じに情婦の愛嬌を受けるよりも、寧ろ自己の感情を害される様に取扱はれることを遙かに望むであらう。

此人に起り得る最も悪い禍は、他の人々と區別して取り扱はれないといふことである。

故に數人の情夫を保持せんとする女子は、此等の情夫を各々特に選べるが如く一人一人に説き付けなければならぬ。他の情夫等の面前に於てさへ此情夫を特に選んだことを説き付けなければならぬ。そして其の他の情夫等を此情夫の面前に於て欺かなければならぬ。人の全く困却せる状態を見んと欲せば、須らく其人を秘かに關係せる二人の女子の間に置くが宜い。さうすれば如何なる狂態を演ずるか見ものである。又女子をも矢張り同じく二人の男子の間に置いてみよ、(此實例は確かに少くない。)さすれば此女子は兩人の男をして互に嘲笑せしめる様に話掛けるに違ひない。若し其女子が兩人に同様に信賴することを言明し、又兩人に同様に馴染であつたことを言明したとすれば、兩人は一刻たりとも其女子に瞞されて居はしない。兩人を同様に取扱ふといふことは、即ち

此兩者がその女子に對して同様の權利を有せることを曝露する者ではないか。嗚呼、女子は是れより善く偽り装ふことを知つてゐる。女子は彼等を毫も同等に取扱はないで、却て伴つて兩人に差別を附ける。そして己れの諂ふ人には、優しい結果であると思はしめ、己れの悪く取り扱ふ人には、戲弄する愛であるが如くに思はしめる。斯るが故に此等の男子は、各々自己の廻り合せを以て満足し、其女子は全く自分の爲めにのみ忙殺されると思ふけれども、實は其女子は唯だ其女子自身の爲めに忙殺せられてゐるに過ぎないのである。

世には惡意有つて戯れる媚が有る。此種の媚は、沈黙や悔りよりも情夫を當惑させる。好人物セラドンが全く當惑し、途方に暮れ、即答毎に我を失へる様を見るのは實に面白いことではないか。愛情よりも温かでないが、然し愛よりも鋭い情を、其人に起さしめるといふことは、げに興味ある限りではないか。

不運

理性は忍耐によつて不運を支ふ可きことを我等に教へる。無用な泣言で反つて我等の不幸を増してならぬことを教へる。人事百般のことを餘りに高く買ひ被つてはならぬといふことを教へる。不幸に泣いて、我等の僅か所有する力を消耗してはならぬといふことを教へる。人には未來を知る力がないといふ事、一事件が果して眞に幸であるか若しくは禍であるかを發見する力は、人間になどいふことを教へる。分別あり温和な人は偶ま不運の餌となつても、例へば慎重な賭博者が時のはづみに受けた悪い打撃を、及ぶ丈け善にしようと思つても、如くに、不運を用立て様と力めるに違ひない。小兒が倒れた時に、己れを傷けた石に泣き叫ぶが如き愚を學ばないで、彼等は必要と有らば、健康に好い焼

薬をも其傷に付け、又傷を癒さんが爲めに傷を痛ましめることをも辭せないだらう。人の作せるものは、悉く人に依つて滅される。たゞ、自然の押捺せる性格のみは、抹殺せられることがない。そしてその自然は、公侯若しくは富者若しくは人君を作らない。榮華を是れ事として育てられたバショイが、若し其の名譽を剝奪せられたならば、何と成るであらうか。黄金のみによつて生活するを得る高利貸が、零落したならば何と爲るであらうか。自己の力を使用す可き方法を知らないで、外界に頼つてゐる見え方は何と爲るであらうか。

總て自分を棄てたものは、自分も之を棄て、しまふ人、運命の如何に關せず人として存在する人は、幸なる人である。世人は、廢墟の下に身を埋めた敗殘の國王を頌讚するかも知れぬ。然し余は其國王を輕蔑する。其國王は唯だ王冠に於てのみ存在してゐるものではないか。王ならざりせば何者でもなかつたではないか。王冠を失つても、乃至始から王冠が無くとも如何にして自活す可き

かを知つてゐる國王は、王冠以上である。王位には、怯者若しくは愚者若しくは悪人も即くことが出来る。只如何にせば此の王位の職責を適當に果す可きかを知る人は尠い。彼は運命に勝ち、運命を物ともしない。彼は自己自身の他に負ふ所が無い。彼自身を表す以外に他に何の術も残つてゐない時でも、彼はびくともしない。國を奪はれて、何を爲す可きかを知らなかつた憐む可きタークイン若しくは最早や自己の力に有らざる職業の外、如何に職業に従事すべきかを知らざるが故に到る處に救助を求め、到る處に無禮に遇ひ、王宮より王宮に彷徨ひ、彼の不幸を侮辱することを敢てせる總ての人々の笑草となりし諸國の王の嗣子よりも、我は幾千倍もコリンズの學校教師となりしスラキユースの王と、羅馬の書記となりしマセドニヤの王を愛する。若し汝にして運命を征服せんと欲するならば、先づ汝は汝自身を運命から獨立せしめなければならぬ。意見に依つて支配せんと欲するならば、先づ汝は意見を支配しなければならぬの

である。

諸王の王の嗣子にはパリスウの王フアラアテスのネゾオノネスを指す。

ルツーの眞髓

社會制度

自然の状態に於ては、人間は萬事をその心内に具備してゐる。數的單一體である。絶對的一體である。自我並びに自我に等しきもの、外には、何ものにも頼るところのなきものである。然るに文明人は分數であつて、分母に支配されて居る。そして此分數の價値は分數と全體との關係によつて定まる。言ひ換へれば個人の價値は、その個人と社會全體との關係によつて定まる。

最善の社會制度とは、人の性質を變更することを得る社會制度である。人民から其絶對的存在を取り去つて、是れに代ふるに關係的存在を以てし、自愛心を變へて社會の愛と爲す社會制度である。各個人は最早や自己自身を一の個體と考へずして、唯だ全體の一部分として考へるやうになる社會制度である。

眞のツル

社會制度

ルッーの眞體

羅馬の市民はカイヤスにも非ず、ルシヤスにも非ずして、唯だ羅馬人其物であつた。羅馬人は自己自身を離れてさへ其國を愛した。レギユラスは彼の主人に屬してゐたが故に、自からカーセーヂ人であると稱したではないか。彼は自ら外國人と稱せしが故に、カーセーヂ人が彼に命ずるに非ずんば、彼は羅馬の元老院に出席することを肯せなかつたではないか。羅馬人が彼の生命を救はうとした時に、彼は怒氣を以て満されたではないか。彼は勝利を得た。而も彼は慘刑に處せられて死せんが爲に、勇んで捕はれたカーセーヂに歸つたではないか。余は現今見聞する人々の中には、殆んど是れに似た者のないことを恐れる。ラセデモンのペダレタスは三百人の議會に入れられようとして自ら候補者に立つたが、彼は拒絶せられた。そして彼はスバルタには、彼より價值のある三百の人が有ることを知つて、喜んで歸つた。此喜びの發露が眞實であつたとすれば、又此眞實を認む可き理由が有つたとすれば、此喜びは彼が眞の市民であつ

たことを表はすものである。スバルタの一女子の五人の子は共に軍中に在つた。彼女は熱心に戦争の情報を待つてゐた。使は到着した。彼女は恐れを以て彼に消息を尋いた。彼は答へて曰ふ、「貴女の五人の子は共に倒れた。」

「何といふ人だ。妾はそんな事をあなたに問ふものか。」

「我等は勝利を得た。」

すると母は走りて神の宮に行き、神に感謝を捧げた。斯の如きは眞の市民である。部分的社會が嚴密に團結したならば、其社會はそれよりも大きな社會から遠ざかつてしまふ。何れの愛國者も悉く外國人に對しては峻嚴である。外國人は唯だ人間である。そして人間は愛國者の眼中には無いのである。

此不便は避けることが出来ないが、然しこれは區々たる小事に過ぎぬ。最も大切なことは我等が我等と共に生活する人々に價值ある様に見える事である。スバルタ人は野心深く貪慾で不正であつたけれども、城壁の中では公平無私と

眞體のーソル

和合とが支配してゐた。書籍の上に於て縁遠い義務を求め、郷里に於ける義務を輕視する四海一視同仁主義者を信じてはならぬ。斯の如き哲學者は、隣人を愛する義務から免れんが爲めに、鞭韃人を愛するものである。

ルソ-の眞髓

國民

知識から無知に至るは單だ一步に過ぎぬ。その分れ途は、屢々國民の中に在る。けれども我等は一度び腐敗せる人民が徳に歸つた例しのあることを聞かない。

或種の道德を有し、随つて法律を尊敬し、又古代の風習を改良することを欲せざる人民は、細心に學問を避け、就中學者を避けなければならぬ。學者の奇警にして獨斷的な格言は、法律と風習との輕蔑す可きことを直ちに人々に教ゆるであらう。此格言は人民を必ず腐敗せしむる確な前兆である。

已に成立した風習を變更するのは、假令或事柄には利益であつても、道德には必ず不利益である。なせなれば、風習は人民の道德を形成するものだからで

ルソ-の眞髓

ある。人民が風習を尊敬することを罷めるや否や、彼等は情慾の外に總ての支配を失ひ、法律以外に總ての拘束力を失ふ。而して法律は惡漢を支配し得ることが有つても、惡漢を善とならしめたことは無い。

青年時代に早く腐敗することを防いだ人の精神は、腐敗して不規則と爲つた人の精神よりも旺盛である。そして是れが疑も無く道德を有する人民の勇氣と理解力とは道德を有せざる人民の勇氣と理解力とよりも優れてゐる一の理由である。早く墮落した人々は、所謂才智、慧眼及び術策と稱せられてゐる斷片的性質に捕へられてゐる。然るに價值有る行爲に依つて、乃至德に依つて、眞に有用な理解力に依つて、自己を卓越せしめ、自己を尊敬せしめる偉大にして尊き智慧と理性との特質は、唯だ早熟の墮落を免れた人々の中のみ發見せられるものである。

國民は個人と同じく唯だ若き時にのみ教へられ易いが、老ゆるに従つて矯正

國民の眞實

され難く爲るものである。風習が一たび建設せられ、偏見が定着せられれば、夫等を改正しようと試みるのは危険にして無益なる企である。

多くの人々は傷を癒さんが爲めに其傷を探ることを忍ぶことが出来ぬ。彼等は醫者を見て戦慄する體の薄弱、無氣力な病人に等しい。

人民の眞の道德を發見する最善の方法は、中流社會の私生活を觀察するに在る。偉大な人のみに注意を限るのは、唯だ遊び人を視るに等しい。

總て大都會は相似てゐる。大都會に於ける人民は總て混合し、其道德も混合する。國民を研究せんとせば、首府に行つてはならぬ。余から見れば、巴里と倫敦とは同一の都會に過ぎない。巴里と倫敦との住民は、偏見の性質に於て多少異なつてゐるけれども偏見の分量は同一である。又兩都の住民の實踐の格言は同一である。如何なる種類の人々が宮殿に集るかといふことは解る。相聚まれる人民、財産の不同といふことが如何なる道德を生ずるかといふことも解る。

國民の眞實

人口二十萬の都會に於ては、人民が如何に生活するかを想像することは難事でない。そして是れ以上に知り得可き智識は、行いて知る勞に値しない。

國民の天稟と道德とを究めんとして行かざる可からざる處は、通商貿易の雜闊少き處、旅客の至ること尠き處、住民の居所を更ゆること稀なる處、財産の甚だしく變轉せざる所、即ち遠隔の田舎のみである。都に於ては忙はしい有様を見ることは出来ても、國家を見ることは出来ぬ。國家を見る爲には遠隔の田舎に行かなくてはならぬ。佛國人は巴里にゐないで、トユールエンにゐる。ヨーク、シアーに住する英國人は、倫敦に於ける英國人よりも尙多く英國的である。ガリシヤに於ける西班牙人は、マドリッドに於ける西班牙人よりも尙多く西班牙的である。此等遠隔の地に於ける人民は其特質を有し、其人民の有るが儘の姿を表はす。そして政府の善惡の結果は、此處に最能く感知される、恰も圓の半徑を延長すれば、區分は益々分明と爲るが如きものである。

平民は人類を形成する。此名稱の下に來らざる少數者は、數ふるに値しない。人間はその境遇の如何によらず、すべて同一ではないから。果して然りとすれば、最も多數のものは最も重要なりと見做さるべきではないか。總て人爵は思想家の前に消滅する。思想家は最も高位の人に於ける感情と情慾を、兵卒の中にも發見する。同一の言語と、同一の色彩とを發見する。——無論多少は違つてゐるが。若し又彼等が眞に異つてゐるものとすれば、其差異は最も多く假面を被つてゐるものに利のないのは、當然の數である。民衆は其有りの儘を表はすが故に、確に愛らしきものではない。けれども世故に丈けた人假面を被るのは、畢竟大なる必要を有するからである。若し彼等の眞面目な有様を見れば彼等は我等を恐怖せしめるに相違ない。

政府

如何にすれば人々を在るが儘で使役することが出来るかといふことを知るの
 は善い。人々を我等が斯く有り度しと望むやうに變へるのは更に優れてゐる。
 哲學者が人民に法律を與へ、人民を賢くならしめ、又幸福ならしめんが爲にの
 み唯だ自己の權威を用ゐた古代に於ては、人々を斯く有り度しと望むが如くに
 導くといふことは政府の大なる技術であつたのである。故に人々を支配しよう
 とすれば、人々を理想的に誘導しなければならぬ。人々を従順ならしめようと
 欲すれば、法律を愛せられるものと爲らしめなければならぬ。又彼等の爲す可
 きことを爲さんとする最強動機が義務の觀念であるやうにしなければならぬ。
 要するに徳を以て世を支配しなければならぬ。

ルソールの眞髓

良く治まつた國家には、刑罰が稀である。是れは寛大の多い爲ではなくして、
 罪人の數が少い爲である。反之國家が衰へれば、罰せられること無くして罪を
 犯す人が多くなる。

ローマ共和政治に於ては、元老院も執政官も曾つて赦免を與へたことがない。
 時に或は、人民が自己に對する宣告を否認したことは有るけれども、然し人民
 も亦赦免を欲しなかつた。赦免の頻繁なのは、犯罪の宣告を永く用ゐざること
 を示すものである。斯くて國家が如何なる方向に趣くかは明白であらう。刑罰
 の頻繁なのは必ず政府が薄弱なる爲か若しくは怠慢なる爲である。何かの役に
 立たないやうな悪人は稀である以上、他人の見せしめにせんが爲に犯罪人の生
 命を奪ふ権利は我輩に無い。但しその人の生命を助けて置けば、他人の生命が
 危険になるやうな場合は、此限りでない。

一政府が比較的善いか悪いかといふことを判断し得る最も簡單にして最も容

ルソールの眞髓

易な一尺度は、其國の人口である。人口の減少する國はすべて衰亡に傾ける者である、人口の増殖する國は、最も貧弱な國であつても、確に良政治の下に在るのである。但し此人口増殖といふことは、政治と道徳との自然の結果でなければならぬ。何故かと言ふに、若し人口が殖民によつて増加し、又は他の偶然的又は外附的手段によつて増加せられるならば、其救助法は禍を明示するからである。

オーガスタスが終身獨身で暮す者を防ぐ爲めに法律を設けたといふことは、即ち羅馬帝國の衰頹を證明してゐる。政府が良ければ、其政治は人民を結婚せしむる様に導くに相違ない。法律は獨身者に結婚を強ゆ可きものではない。強制せられたもの、結果は、吟味するにも及ばぬ位明かではないか。憲法に牴觸する法律が排斥され又無効となることは、明白の事柄である。然るに道徳の感化と政府の自然の傾向とによつて生じたものは、是れと異なつてゐる。此等の

みは永久の結果を生ず可きものである。

聖ペテロ寺院の善き長老は、罪惡の根源に溯り、一舉して罪惡の根源を根絶しようとするよりも、離れ々の罪惡に救治薬を求めの方が常に良き策畧であると考へた。けれども病人の身體に起る色々の潰瘍に對して、各別に薬を施す必要は無い。唯だ此れ等の潰瘍を惹起した血の全體を清むる必要があるばかりである。

英國は農業獎勵の爲めに賞金を與へる。これは、農業が其處に永く榮えぬといふ十分な證左ではないか。

政府の善惡を示す第二の目標は矢張り人口である。但し前のご方法が違ふ。今度のは人口の分布に依るのであつて、人口の多寡に依るのではない。二個の國家が其廣袤と人口に於て全く等しとしても、力の點に於ては甚だしく相異なることが出来る。兩者の中の強國は、疑ひもなく其住民が其國の各地を通じて

ルソールの眞體

最も平等に散布せる國である。左程多くの大都會なきが故に、一見して繁榮ならざるが如く見ゆる國は、常に他の國に勝つ。多数の大都會は國を疲弊せしめ、國を薄弱ならしめる。大都會の生む富は、外見上のもの、幻影の如きものである。是は金銭多くして力が尠いからである。

若し我等が政府の人民に及ぼす結果と行政の總ての措置とによつて、政府の性質を究めるのは至當であるが、又唯だ華麗な行政と宰相の妄言とを以て彩られた政府の外形のみを見たところで、何等學ぶところがない。形式の根本的差異は此等總ての措置に分配せられてゐるが故に、此等總ての措置を聚合しなれば、眞の差異を確かめる事が出来ぬ。或る國に於ては、政府の精神は、婢僕の取扱によつて發見される。他の國に於ては、國民の眞に自由なるや否やを判断する爲には、都市に於ける國會議員の選舉に居合せなければならぬ。

國の精神やその結果は都會と田舎とによつて同一で無いから、何れの國でも、

唯だ國の都會のみを見て、政府の適當な觀念を形成することは不可能である。國家を形づくるものは田舎であつて、國民を形成するものは田舎漢である。

何等特殊の人相が無い爲に、畫家の前に坐る必要無き人がある。何等特殊の性質が無い爲に、歴史家を要せざる政府がある。人の地位を知れば、直ちに其人が其地位に於て爲すべき總ての事を察知することが出来るではないか。

爲政者が何等かの意味で民權を侵害したのでなければ、人民は容易に法律に反抗するものではない。

支那に於ては、此確たる原理に依て、或る地方に於て人民の蜂起する毎に、先づその爲政者を處罰する。

ルソールの眞體

國王と國家

アルキメデスは、或る人が靜に海岸に坐り、大船を容易に水に入らしめるのを以て、才幹有る帝王が其廟堂に於て廣い領地を統轄し、各事を活動せしめ、然も彼自身は靜かに坐してゐるに例へた。歴史上名聲噴々たる諸の大王は、決して人を統御するべく養成されて現はれたのでない。人を統御するといふ學問は研究によつて得らるゝこと尠なきもの、支配するよりも服従することによつて得らるゝものである。

君主政體が好く統轄せられる爲には、其國の大きさ及び廣さが其統轄者の才能に比例することを要とする。勝利を得るは、支配するよりも易い。強い楨に一指を觸るれば、よく世界を振撼することも出来るが、世界を支ふるにはヘル

ルソーの眞髓

キユルスの肩を要する。

統御の術は、畢竟法律の保護者と爲り、人民をして法律を愛せしめる幾百の手段を發見するに在る。薄弱な人が權力を有すれば、最も賢明な人をも犯罪せしめて、處罰するだらう。然るに賢明な政治家は、犯罪を防ぐことを知つてゐる。彼の尊敬す可き王國は行爲上の王國なるよりも寧ろ意志上の王國力である。彼若し總ての人の行を正しからしめることが出来れば、即ち最早爲す可きことが無いのである。彼の事業の完成は、彼の最早活動せざるに在る。

國王に應はしい唯一の頌徳法は、雄辯家の劣悪な口を以てせらるゝものではなくして、自由民の聲である。

國王は善き建言を與へ得る人のみを其顧問とせねばならぬ。人民を治むる術は人民を教訓する術よりも難く、又人々に善と強ひ、又人々をして正しきことを自ら進んで爲さしむることよりも難い、といふのは普通國王の地位の誇から

ルソーの眞髓

ルソールの眞髓

する古い偏見である。これは棄てなくてはならぬ。最も偉大な最も賢明な人々には、名譽ある保護を宮廷に於て爲さなければならぬ。彼等は其名望によつて人民の幸福に貢献したのである。人民に智慧を教へたのである。故に之に應はしい報酬を、宮廷に於て爲さなくてはならぬ。斯うしてのみ我等は、人類幸福の爲に働いた徳、科學及び權威の力を認めることが出来るのである。然るに力が唯だ一方にのみ存し、天才と智慧とが唯だ他の一方にのみ存する間は、學者は殆んど偉大な事を考へること無く、人君は猶更殆んど偉大なことを爲すことが無い。随つて人民は卑劣、破廉恥にして又不幸であらう。

立法者

人民を改善しようとする人は、須らく性質を變更することの可能なこと、例へば何人をも變更するの可能なことを、自ら感知しなければならぬ。抑も個人は、夫れ自身では完全にして單獨な全體であるけれども、又一層大なる全體の部分でもある。個人は大なる全體から幾分か生命と存在とを受けてゐるものである。此點をよく知つて、個人變更の可能を悟らねばならぬ。又彼は、人の組織を強めんが爲めに、人の組織を變更する力をも有しなければならぬ。即ち我等が自然から受けた物質的にして獨立せる存在に換ふるに、部分的にして道徳的な存在を以てする力を有しなければならぬ。

一言にして之れを云へば、此人は人間から自然の力を取り去り、是れに代ふ

るに今まで人に知られなかつた別種の力を以てしなければならぬ。補助なくしては、人の使用し得ざる體の力を以てしなければならぬ。人の自然力が死滅し滅亡するに随つて、人の得た力は強く且つ永續的になり、又制度も堅固に且つ完全になる。各個人が夫れ自身では何等の價値も無く、其他の個人と連合しなければ何等の力も無いやうになつた時、又全體の力が個人個人の自然力を合併せるものに等しきか若しくは夫以上であるやうになつた時、その時こそ法制は最高度の完全に達したと稱することが出来る。

偉大な君主は非凡の人だと云ふことが真ならば、偉大な立法者は何であらうか。元來、偉大な君主は、模範に従ふ以外に何事をも爲すことがない。そして此模範を作るのは取りも直さず立法者の仕事ではないか。一は機械を作る機械帶であつて、他は其彈條を巻き、之れを發動せしむる職工ではないか。

古代の立法者は、人の思慮によつて支配されぬ人々を神の權威によつて感化

しようとして、自己の決心を神の口に託した。然し斯ういふことは、何人でも出来るといふ譯のものではない。平凡な人間が神托を云爲したところで、誰しも之を信じはしない。立法者の才智ある心は眞に奇蹟であつて、立法の使命を受けた所以は此所にある。

石の板に彫刻することや、神託を購ふことや、或る神と奥妙な交通を爲したと偽はることや、鳥を教へて自己の耳に耳語かしめることや、乃至其他俗物を瞞着するさまざまの伴りを發見することは誰にも出来る。けれども、唯此等の方法をのみ知る人は、或は狂人の群を集むることを得ても、國を建設することは出来まい。そして其人の途方も無い事業は、間もなく其人と共に滅亡するだらう。要するに無益な幻惑力は唯だ一時的のものである。唯だ智慧のみは永久的である。

今尙現存する猶太の法律、イシュマエルの子孫の法律、十世紀間世界の半を支

ルソーの眞髓

配せる此法律は、此法律を創めた人の偉大なりしことを今日に至るも明言してゐる。虚飾的な哲學者や、盲目な宗派心に囚はれてゐる人は、此等の法律をば唯だ成功せる詐欺師の業と考へる。けれども眞の政治家に至つては、此猶太の制度は、堅牢な組織を統轄せる偉大にして有力な天才の作であることを知つて賞讃する。

國民が有名になれば、やがてその法制は頽廢する。ライカーガスの法律は、スバルタの人民が希臘諸邦に知られぬ以前に於ては、長い間スバルタの幸福に貢献したのである。然し希臘諸邦に知られるやうになつてから、頽廢した。

法律

ルソーの眞髓

正義や自由の存在するのは、法律の力である。此有機的の力は一般の意志を代表し、理義の上から自然的平等を、人間の中に建設する。此天來の聲は總ての人民に常識を口述し、又人民は其判断に随つて行ひ、以て前後矛盾することなきを得るのである。このことは、總督が命令を發する時にも言はなければならぬことである。何となれば、人が法律を離れて他人をして其人個人の意志に隨はしむるとすれば、其人は直ちに文明社會から踏み出で、純然たる自然の狀態とするからである。自然の狀態に於ては必至に順はざる可からざるより外に、從順を命ぜられることがない。

法律の濫用は、強者の攻撃の武器ともなつたが、弱者の攻撃を防ぐ楯ともな

る。公益といふ口實は、人民の最も危険なる禍である。

政府の最も必要とするもの、否恐らくは政府の最も困難とするものは、總べての者を公平に取り扱ひ、富者の横暴に對して貧者を保護する堅固な保全である。擁護す可きの貧者あり、抑制す可きの富者有る時は、已に最大の害が現はれた時である。法律の十分に行はれるのは中流社會のみであつて、法律は富者の財寶に對しても、貧者の不幸に對しても等しく無能である。富者は法律を避け、貧者は法律を潜ぐる。一は法網を破り、他は法網を潜ぐる。

萬人の名に依つて、各個人に平等に課せられた状態は、何人にも不快なることが無い。随つて最悪の法律と雖も、猶最善の主人よりも優つてゐる、なせなれば、總ての主人には依怙最負が有るけれども、法律には依怙最負が無い。

自由は常に法律と運命を共にする。兩者は共に行はるゝか若しくは共に倒れる。法律は増加すればするほど、輕蔑せられるやうになる。是れは過去を矯正

すること無くして、新規の悪弊を導入するに異らぬ。斯くては、検査官はすべて唯だ新規の違犯者であつて、以前の違犯者の違犯に與かるか、若しくは彼等自ら掠奪する運命を有する。徳に對して與へらる可き報酬は間もなく強奪の報酬となる。最も不徳な人々は最大の名聲を博し、その位置が高ければ夫れ丈け益々賤しむ可きものと爲り、且つその威嚴は彼等の汚名を益々顯者ならしめる。斯くて彼等の名譽が、それ即ち不名譽となるのである。彼等は有力者の賞讃や婦人の庇護を購ふことは出来るが、然し其代價として正義と義務と國家とを賣却する。而も彼等は、自己の不幸が自己の罪惡から生ずることを悟らずして、悲み叫けんで曰ふ、「總て我等の不幸は、不幸から保護せられる爲に我等が支拂つてゐる者から生ずる」と。

善政の下に在る國家は、如何なる口實によるも、法律の不公平を容さない。國家から恩賞を受くる人士と雖も、名譽を以て返報せらる可きものであつて、

特權を以て返報せらる可きものではない。法律を免せられるのは、大なる特權である。考ふる者が有るやうになれば、共和政治は衰頽に瀕せる時である。

總ての法律の中で最も重要なものは、大理石に彫られたものや、黄銅に彫られたものではなくして、唯だ人民の衷心に彫られたものである。そして是れは國家の眞の憲法を形成するものであつて、日々新しい勢力を得るものである。

汝の法律が老朽消滅する場合に、其法律を復活し、若しくは其代りを作るものは、これである。人民をして其制度の精神に順はしめ、習慣の力を官憲の力の代りと爲らしめるものはこれである。これとは何か。言ふまでもなく道徳、風習殊に意見に外ならない。然るに我が政治家は此方面のことを全く知らない。

たゞ大立法者は秘かに之れを思ふのである、彼は或る特殊の規則に没頭するが如くに見える。けれども、然しその特殊の規則といふのは、畢竟道徳が徐々に生長して遂に動かす可からざる大縁門となる、その要石に外ならない。

自由

自由は潔白や徳と等しく、我等が此等のものを所有する間のみ其價値を感知する。此等を失へば、此等に對する趣味をも同時に失ふのである。

サトラップがスバルタをパーセポリスに準へた時に、ブラスタスは、斯う言つた、「余は貴國の樂しみをよく知つてゐる。けれども汝は我が國の樂しみを知らることが出来ぬ」と。

奴隸は足械の爲に總てのものを失ふ。逃れようとする願望さへも失つてしまふ。ウリセスの友が殘忍を愛した様に、奴隸は其束縛を愛する。元來、人を指揮しようとする欲望のない人間を柔順にすることは甚だ難く、又最も巧妙な策略と雖も、唯だ自由のみを欲する人を服従せしめることは、容易の業でない。

けれども常に有ゆる運命の危険を冒さうとし、運命の順調なるか若しくは順調ならざるかに随つて、平氣に支配もし若しくは服従もしようとする卑しい野心家には、容易に階級の別が生ずる。

自由を愛するに適する人は甚だ尠い。人々は皆支配せんことを欲し、又支配する約束で服従することも怖れないのである。成り上り者は十人の従者を得んが爲に、百人の主人に奉仕するだらう。君主政體の下にある貴族は、奉公奉仕といふ説を大いに高慢らしく使ふではないか。貴族が國王を己れの主と呼ぶの名譽を有する時、彼等は自己自身を偉大にして尊敬す可きものと思つてゐるではないか。然り、彼等は共和黨を輕蔑するけれども此共和主義流のみ、自由を有するもの、貴族自身よりも確かに貴ぶ可きものではないか。

人民は自己の權利を擁護せんが爲めに支配者を推舉したのであつて、自己自身を征服せんが爲めに支配者を推舉したのではない。是れは總ての政治的權利

の根本的格言である。ブッニーはトラジャンに向つて斯う言つた「我等が君主を戴くのは、畢竟君主に依つて他の主人に仕へることを防がが爲めである」と。

「自由を抛棄するは、人格を抛棄し、人道の權利を抛棄し、個人の權利をも抛棄するに異らぬ。世の中に、總ての物を悉く抛棄する人に着ける藥は無い。斯の如き抛棄は、人の天性と兩立し難きものである。人の意志から總ての自由を取り去るのは、人の行から總ての道義を除くのと異ならぬ。或る哲學者が「奴隷の子は奴隷として生れたのである」と眞地目に公言したのは、言ひ換へれば「人は人として生れたるに非ず」と斷定したのと異なるところがない。

人間は文明人に於ては眞に自己自身の主と爲る道徳を有する自由を持つてゐる。情慾の衝動は束縛することが出来るけれども、自己自身を束縛することは到底不可能ではないか。我等自身の規定した法律に従ふことは自由に外ならぬ

自由

ではないか。

人民の自由は國家の強さに比例する。

從 屬

從屬に二種ある。自然に屬する事物の從屬と社會に屬する人々の從屬即ち是である。事物の從屬には道德なく、自由と衝突することもなく、随つて害毒を生じない。人々の從屬は始末に終へぬもので、總ての害毒を生じ主從孰れをも腐敗せしめる基である。此害惡を治療する方法は、所詮人に代ゆるに法律を以てし、公衆の意志を保護するに一私人の意志を以てせずして眞の力を以てするより外にない。若し人民の法律が、自然の法則の如く、人類の力の勝ち能はざる程不撓のものとするれば、人の從屬も亦事物の從屬と爲るだらう。故に我等は自然國と開明國との長所を共和政體に結合しなければならぬ。我等は自由と道義とを連結しなければならぬ。自由は罪惡を防ぎ人を護るものである。道義は人

眞のニツル

從屬

を勵まして徳を行はしめるものである。

戦 争

戦争は人との關係にあらずして、國と國との關係である。此際各個人は、唯だ偶然の敵であつて、人としての敵でもなく、市民としての敵でもなく、唯だ兵士としての敵である。國家の一員としての敵ではなくして、唯だ國家の防禦者としての敵である。要するに國家は唯だ國家を敵とすることが出来るけれども人を敵とすることは出来ぬ。性質の異なる事物の間で、眞の關係を述べることは出来ないでないか。

此原則は總ての時代の格言や總ての文明人の行爲にも適合する。宣戰の布告は、敵國の王に警告するのではなくして敵國の臣民に警告するものである。國王若くは私人、若しくは人民全體が、他國の君主に對し宣戰を布告すること無

くして、その臣民の所有物を掠奪し、その臣民を虐殺し、その臣民を捕虜にするのは、是れ堂々たる敵ではなくして、強盗である。正しい君主は、正々堂々たる戦争をする。そして敵國の公共に属するもののみを占領し、個人の身命財産を尊重する。彼は自己の権利の基礎たる個人の権利を尊重する。戦の終結は同時に總べての敵對の終結であるから國の防禦者が武器を携へてゐる間のみ、之れを滅ぼす権利をもつてゐる。彼等にして武器を擲つて降服すれば、最早敵でもなく、敵の器械でもなく、人間の名稱を回復する。随つて我等は最早彼等の生命に對して何等の権利をも有しない。

國の人員を滅すこと無くして、國を滅ぼすことを得る場合が往々ある。故に戦争は、戦争の目的を果すに必要な範圍以外には何等の權力をも有するものではない。

國の眞實の

奢侈

奢侈は、奢侈を所有する富者と、奢侈を渴望する貧者との雙方を腐敗せしめる。

炎熱焼くが如き南風が吹くと、青草を食する害虫が繁殖して、爲に有用な動物の食料が滅却し、行く處として飢饉と死とを齎らさぬ所がない。それと同じやうに奢侈は萬人間の害虫を養はんが爲めに労働者と市民とを壓迫して其膏血を絞る。奢侈は、貧者を養ふと稱する口實の下に、奢侈ならざるものを貧ならしめ、早晚國家の人口を減少せしめる。人間は、何人と雖、貧者たる可き筈の者ではないのである。

工業や其他有利な技術が繁盛となるにつれて、農業の如き最も有用な事業が

國の眞實の

必ず閑却される。其結果として農夫は輕蔑され、租税を以て壓迫される。そして此租税の一部は害蟲の奢侈を維持するに必要なだけに外ならぬ。農夫は勞役と飢饉との間に生涯を送るやうに宣告されてゐる。彼等は其田畑を棄て、都會に行つてパンを求め、何たる矛盾であらう。彼こそ都會にパンを供給す可かりし筈ではないか。土地は荒廢し、不幸な人民は大道に群集する。そして此等不幸な人民は、乞食や盜賊となつて、何時かは岩の根か糞堆の上に、其不幸な一生を終はる可き運命を有すものである。そしてこれは、畢竟工業の進歩と奢侈とから生ずる結果なのだ。富を追うて止まぬ人民がやがて陥るべきさまぐの不幸の眞因は爰にあるのだ。斯く國家は一方に於て富むと共に、他方に於て薄弱となり貧窮となるのである。斯くて最も勢力ある王國は多大の辛苦を嘗めて自己を富裕ならしめると共に自己を荒廢せしめ、遂には貧窮な國の爲に侵入されて、その餌となるのである。虛榮と遊惰とは、科學と奢侈とを生んだ。奢侈

の趣味は、常に學問の趣味を伴ひ、學問の趣味は、屢々奢侈の趣味を伴ふ。

奢侈は貧者にパンを與へる爲めに必要かも知れない。けれども奢侈がなかつたならば、貧困もなかつたのである。

奢侈が國家を支へるのは、恰も飾柱が宮殿を支へる如く、若くは古びた梁木が古い建物を支へるが如きものである。何れはその爲に倒れなければならぬ。賢く思慮ある人は斯かる支柱で支へられてゐる家を立退くであらう。

奢侈は一百の貧民を都市に於て養ふかも知れぬが、十萬の人民を田舎に於て滅亡するではないか。金錢は贅澤物を購はんが爲めに、富者と藝術家との手によつて流通されるけれども、勞働者は使用することが出来ない。富者がレースの飾ある服を着る爲に、勞働者は上衣を着ることが出来ぬではないか。餓えた人を養ふことの出来るものを矢鱈に消費するのが奢侈である。奢侈は人道から視て憎惡す可きものではないか。奢れる者の臺所に肉漿グランドビスを供へざる可からざ

るが故に、大多數の病める貧民は肉汁フロイスをさへ缺くではないか。奢れる者の食卓に飲物を供へざる可かざるが故に、水呑百姓は唯だ水のみ飲まなければならぬではないか。富者の髪に髪粉を付けざるべからざるが故に、貧者はパンをさへ缺くではないか。

最も自然な感想のみに依つて考へても、適度といふことは奢侈と華美とを蔑視するのみならず、我等の趣味は奢侈と華美とを猶多く蔑視する。端正と釣合とは總ての人の目を悦ばしめ、幸福と善き秩序とは人の心情を喜ばしめる、人の心情は之をまた渴望するものである。然るに彼の秩序や幸福に何の關係もなく何の役にも立たぬ華奢は、傍觀者の心に如何なる觀念を起すか。趣味の觀念を起すといふのか。否、否、趣味は華美なものよりも、質朴なものによつて遙に能く表はされるではないか。便宜の觀念を起すといふのか。否、否、世に華奢よりも不便なものが有らうか。偉大の觀念を起すといふのか。否、否、こは全く正

ルソ-の眞髓

反對ではないか。

余は大宮殿を見る毎に、即ち自ら問うて曰ふ、なせ此宮殿は今少しく大きくないのかと。又五十人の婢僕を畜ふる人を見れば、なせこの人は、百人の奴僕を畜へないのかと。又美しい什器を見れば、なせ此什器は黄金で作られてないのかと。又馬車に鍍金せる人を見れば、何故此人は天井にも金箔を施さないのかと。又若し其人の天井が鍍金せられてゐるならば、何故其人の屋根が金箔を施されてないのかと、斯う心に問はざるを得ない。昔高樓を築かうとした人が之れを蒼空まで達せしめようと力めたといふ。宜なるかなである。然らざれば之れを築くとも無益であつたに違ひない。而も彼等の止まつた點は、唯だ彼等の無能を一層能く表はしただけに違ひない。

噫、弱くして誇張的なる人間よ。汝は果してどれほどの力があるのか。我に之を示せ、さすれば余は汝の不幸を指摘してやる。是れに反して何物も、意見

ルソ-の眞髓

ルソールの眞髓

の爲めに犠牲にせらるゝこと無き系統に於ては、系統の眞の利用と並びに系統と自然の需要との合致は、常に理性をして是認せしめるのみでなく、人の目と心とに感謝の念を起さしめるものである。何となれば此種の系統に於ては、人は自己自身を唯だ快い親愛の下にのみ見、且つ之れを自己自身に十分なものと見て眺め、其缺點は顯著でなく、その莞爾たる書は憂鬱の感想を起さないからである。

憂鬱となることも無く、又人生の運命を歎くことも無くして、一時間を高貴の人の宮殿と、其宮殿を支配する華美の中に消す人あらば、余は其人を侮蔑する。

富者に就いて

富者は功績よりも金錢を尊ぶ。金錢と勢力との價値を比較する場合には、富者は勢力を以て財貨に及ばぬものと考へる。富者に仕へる者が、たゞ纔かに生活の資を給せられながら、生涯仕ふることも尙此者の拂ふ可き義務が拂はれ盡されてゐないと、富者は想つてゐる。富を愛する人は、人に仕ふる様に造られ、富を賤しむ人は人を支配する様に造られてゐる。財貨の力は、決して貧しき者を富める者に服従せしめる力はない。唯だ富を得んとする欲望ある貧者のみ富者に服従させられるのである。若し此の欲望がなければ、貧者とても矢張り主人に違ひない。人に服従する必要がないのだ。

貧者は富者の鞭の下に呻き、富者は偏見の鞭の下に呻く。薔薇物語に曰ふ「富

ルソールの眞髓

富者の真諦

は人を富ましめない」と。富といふものは金庫の中にあるのではなくて、金庫から取り出したもの、使用の如何に在る。財貨の用途如何に依つてのみ、我等は自己の所有物を役立てると言へるではないか。けれども富を浪費する方法は富よりも無盡藏である。故に我等の享樂は、我等の消費した金高に比例するものではなくして、之を消費する方法の如何に比例する。

愚人は金銀の塊を海中に投じて、之に依て快を得たと思ふかも知れぬが、然し斯ういふ狂妄な快樂と、識者が是れよりも遙かに少い金銭で得る快樂とを比較して見たらどうか。世に絶對的な富と言ふべきものは無い。富といふ語は、唯だ富者の欲望と之を充たす力との間に存する餘分の關係を指すのみである。だから或者は唯だ一エーカーの土地でも富んでゐるが、或者はあらゆる財寶を積んでも、尙且つ貧しいと言はなければならぬ。むら氣と散財には際限が無い。そして此等は最も多く貧民を作るものである。何人でも健康で、日用品を缺か

ず、其心から反覆常なき欲望を放逐することが出来れば、其人は十分に富める人と言へる。これ即ちホレーヌの所謂富めるにも非ず、貧しきにも非ざる中庸である。

富者の真諦

乞食

或人は言ふ、乞食に食を與へるのは、唯だ此懶惰な商賣を愛する徒、社會の重荷となる浮浪の徒を増加し、同時に彼等の爲すことの出來た勞力を社會から剝奪するのみであると。斯の如き言は實に富人の無人情に媚ぶる哲學者の格言に外ならない。

我等は、多大の費用を費して、社會の道德を腐敗し滅却するだけに過ぎざる多くの無用な職業を許容し維持してゐるではないか。反之、乞食といふものも一の商賣と考へれば、そは反つて人情と親切を養うて、人間を親密にさせる機會となるではないか。又之れを一の才能と考へて、藝人に拂ふが如く、乞食の雄辯に酬ゆるに何の不可があらうや。

役者は少しばかりの無意味な涙を流させるだけであるが、乞食は我が心情に觸れて、我をして彼れを救はせるやうに誘ふではないか。役者が世人に他人の善行を愛せしむるやうにするならば、乞食は我を勵し、我をして自ら善を爲さしめるものではないか。悲劇の演技によつて起される總ての優しい情は、演技の終了と同時に忘却される。然るに貧しい者を救済すれば、之を思ひ起す度毎に私かなる満足の念が起り來るではないか。而して此満足の念は幾らでも反覆されるではないか。若し乞食が國家に重荷だとすれば、同様に如何に多くの職業も、亦國家の重荷でないと言へようぞ。國王は乞食の増加を防ぎ得るかも知れぬが、然し人民をして乞食の職業を嫌はしめるには、勢ひ人民を無人情不自然と爲らしめざるを得ない。貧民は國家に對して如何なるものであるかは知らぬが、少くとも彼等も亦吾同胞であることは明かでないか。彼等の懇願する聊かの救を拒むといふことは、恕しがたい無情と言はなければならぬ。成程彼等

の大部分は、無頼漢であらう。けれども正直な種々な不幸の爲めに此状態に零落することが度々あるではないか。實際現世は不幸に充ちてゐるではないか。神の御名によつて助を求め、又僅か一片のパンを見知らぬ人に乞ひ求める憐れな人が、正直者の不幸に溺れたのでないと斷言することが、どうして出来ようぞ。我若し其人を拒絶すれば、其人は失望して了ふに違ひない。無論我等の施物は唯一時的の救助に過ぎぬとは言へ、是れ少くとも我等が彼と不幸を共にせる證據であつて、拒絶の殘酷を和げるものではないか。乞食に拂うた好遇の印ではないか。僅許りの金や一片のパンは、其價は如何に少くとも、神様が救つて下さる」といふ返答よりも親切である。斯ういふ返答は、宛も神の賜物は人間の手にないかの如く思つてゐるもの、世には富者の穀倉以外に何か他の穀倉があるかの如く思つてゐるものではないか。要するに此等の不幸な人々に對する意見は隨意であつて、假令我等が此哀れな乞食に負ふ所が無いとしても、少

眞實のソル

くとも我等は自己に對する尊敬の手前だけでも、人類の苦痛若しくは同類の苦痛を取り去る爲め、世の不幸に對して我等の心情が無慈悲とならぬ爲めに、施しをしなければなるまい。

慈善を誹謗する者は、慈善を行ふのは唯だ盜賊の養育院を建設するに過ぎないもので、何の益もないと主張する。けれども結果は正反對であつて、慈善は却て乞食の盜賊と爲ることを防ぐのである。貧民に乞食になれと奨励するのは誤れる政略であらう。けれども貧民が一度乞食に零落したならば、乞食が更に盜賊と爲ることを恐るゝが故に、乞食を保護する必要がある。職業で自己を維持する力が缺乏するといふことほど、職業の變更を人に促すものは無い。此故に一度此怠惰な職業の味を覺えた者は、勞働を忌避して、再び其手を働かせるよりも、寧ろ竊盜を働いて絞殺されることを欲する位であらう。一ファージング(我が約一錢)を乞うて直ちに拒絶せられるとする。一ファージングの二十倍

眞實のソル

は、よく貧民の晩餐を購ひ得るのである。そして二十回乞うて二十回拒絶されればやがて乞食は絶望する。聊かの施物によつて一人を犯罪から救ひ、他の一人を死から救ふことが出来ると思へば、誰れだつて之れを與へることを拒まなにいに違ひない。乞食は富民の寄生蟲であると誰か言つたと覺えてゐる。小兒が父母に寄食するのは自然である。ところが此等の富裕にして殘酷な父母は、乞食を小兒とする事を肯んせずして、乞食を養ふの勞苦を貧民に委ねてゐる。何たる矛盾であらうぞ。

自殺

生存を止めようとする場合があつても、決して輕卒に之を實行してはいけない。元來人間は何の目的もなく地球上に置かれたものではない。神は、生命を與ふると共に、生命を利用すべき仕事をも與へたのである。若し夜に至る前に、仕事を仕遂げたならば、其日の殘は休むも差支へないけれども、仕事は済して置かなければならぬ。吾々は至上判じやうじはんに對して答ふべき答を用意して置かなくてはならぬ。至上判は必ずや吾々に時間の内譯を問ふに違ひない。世には、「吾こそ十分長く生存した」と誇り得べき善人が一人だつてあるだらうか。あれば知らせてくれ。自分は其人が如何なる有様で生涯を送つたか、生命を棄てる権利が果して十分にあるかどうかを知り度いと思ふ。

世人は人生の不幸のみを回想して「人生は災だ」と言ふ。けれどもすべて世の中の相をつら／＼考へて見ると、苦痛の混せざる幸福は一つもないのである。そして苦痛の伴はざる幸福がないからと言つて、強ち人生は何の價値もないといふ理由にならないでないか。且つ又性來惡なるものと、單に偶然惡と爲つたものとは、決して混同することが出来ぬ。元來人間の受働的消極的生活は何等の價値あるものでなく、單に身體以外のものには何等關係するところのないものである。そして身體といふ重荷は間も無く取り去られるものである。然るに人間の自由な活動的な道德的生活は、意志を働かすもの、人の存在の全體を支配す可きものである。

生命は、榮ゆる惡人には禍であつて、不幸な善人には祝福である。蓋し生命を善若しくは惡とならしめるものは、實に一時的變動の如何によるものではないとして、生命の目的と生命との關係如何によるものではないか。

生活に倦んだ人は「人生は災だ」と云ふ。此種の人は、早晩人生から脱れ、ば、又必ず生命は幸福だと云ふに違ひない。こは當然の眞理であつて、人生は少しも變らないのであるが、只彼等自身が變つた爲に、彼等は死して始めて人生は幸福だと言ふに至るのである。故に先づ今日から自分を改めて見よ、元來總ての惡は、心情の惡癖によつて生ずるものであるから、その悪い心の傾向を矯正して見よ。さすれば人生の災は拭ひ去られてしまふ。家を整頓するのが厄介だからと言つて、家を焼き捨てるが如き愚を學ぶな。

不滅の實在者に取つては、二十年や三十年間は何でもない。苦痛や快樂は、陰の如くに過ぎて行く。人の一生も一刹那にして過ぎ去るもので、人生を人生だけで考へれば何の價値も無い。生命の價値は、之れを用ふる用途如何に倚る。善行は殘存する、而して生命を貴重ならしめるものは唯だ善行のみである。生存が幸福になるのも不幸になるのも、たゞ／＼汝自身によるのであるから、決

ルソーの眞髓

して「生存は余に禍である」と云つてはならぬ。又假令生存の禍であることを見出したとしても、それは寧ろ生存を続けなければならぬといふ理由にこそなれ、決して之を捨てる理由にはならない。生命を絶つ権利は、人間にはないのである。生命の創造者に背いたり、運命を欺いたりする権利が、人間にある筈がないではないか。

自殺は、卑怯にして不都合千萬な死である。人類の竊盜である。人間が同胞を見捨て、死ぬ前に、必ず同胞に對する義務を拂つて置かなければならぬ。「余は何等の係累もなく、又世に何の役もせぬ無用者である」と言ふかも知れぬが、之はたゞ一日のみを見る淺薄な哲學者と言はなければならぬ。元來人間は世間に一歩でも踏み出した以上は必ず其所に何等かの義務があるのだ。單に生存するだけでも、社會に有用なのだ。

輕躁な青年よ。若し汝の腦底に、徳の極微の閃光だに残つてゐるならば、余

の許に来るが宜い。さすれば余は生命の愛す可きことを教へてやる。命を絶ちたいといふ誘惑が起る度に、必ず心中に斯う問うが宜い、「死する前に今一つ善をしなければならぬ」と。斯くて貧しきものを慰め、不幸なものを慰め、若しくは壓制を加へられてゐる者に保護を與へてやれ。若し斯う考へて、今日一日生きのびることが出来たなら、明日も明後日も、乃至終身、自殺しないで済むだらう。若し斯う考へても、尙ほ自殺を思ひ止まる事が出来ぬやうな奴は、無頼の墜子である。よろしく死ぬが宜い。

ルソーの眞髓

酩酊

總て不節制は罪惡である。最も貴むべき能力を奪ふものに至つては、殊に然りである。酩酊は、人を墮落させるもの、少くとも一時的に其人の理性を遠けて、終に其人を愚鈍ならしめるものである。けれども酒を好むといふことは、強ち罪惡でない。酒が罪惡を醸すといふことは殆んどないからである。そは人を愚鈍ならしめるけれど、人を下劣ならしめることはない。酒の上のつまらぬ口論は、反つて愛着の心を喚び起すものである。飲酒家は、一般に温情寛大ではないか。彼等は、大抵價値のある人で、實直で公正で誠實で勇敢で且つ又正直である。

表面は美德のやうに見えて、裏面に罪惡を孕んでゐるものは、世に數知れぬ

位ある。聖賢は節制で酒を慎むけれども、詐欺師は表裏相反の生活をする爲に酒を慎しむ。

國民道德の良くない國、隱謀や姦淫や反逆やの多い國に於ては、人々は無意識に胸襟を開くことを恐れる。すべて酩酊を嫌ふ人は、酩酊を防がなければならぬ大理由を有するのである。だから瑞西に於ては酩酊は寧ろ重んぜられ、ネーブルスに於ては最も忌まれる。けれども眞に恐る可きものは、瑞西の無節制であらうか、將た又伊太利の謹慎であらうか。

此惡習は侮辱すべきものでない。酩酊は夫れだけで、既に十分不體裁でないか。酒は我等を邪惡ならしめるのではなくて、唯だ我等の邪惡を暴露させるだけである。酩酊せる時にクリストスを殺した人は、冷靜な時にヒロクテータスを死に至らしめたではないか。酩酊は人を狂亂せしめるものであるが、然し狂亂せるのは強ち酩酊に限つたことではない。すべて情慾には其傾向がある。た

だ前者は燃えて一分間に消えるのと、後者は心の奥底に潜んで消えないとの差があるのみである。酩酊の狂亂は一時的で又容易に之を避けることが出来る。そして此缺點を除いて考へると、酒を飲んだ時に悪事を働く人は、酒を飲まない時に悪計畫を隠して居るものであることは確かだ。

生 命

生きるといふことは呼吸するといふだけの意ではない、働くことである。我等の官能、我等の感覺、我等の才能、我等の各部分を使用することである。年齢を最も多數に重ねた人は、最も永く生存した人だとは云へない。唯だ最も多く生命を感じた人のみ、最も永く生存した人だと云へる。此意味から言ふと或人は生るゝや否や直に死んでゐながら、而も百歳になつて始めて葬られたと言へる。そんな人は若い時に死んだ方が反つて勝利者であつたと言へる、少くともさうであつた方が少しは生きてゐたと言へる。元來、我等が如何に巧妙に此世の不幸を増加しても、生活が重荷になつて、自然的生活を續けるよりも死ぬことを擇ぶまでには至らないのである。さもなければ、幾多無數の人は意氣沮

ルソーの眞髓

喪、失望落膽して、人種は永く存在することが出来なかつたに違ひない。従つて、若し存在する方が存在しないよりも優つてゐるとすれば、是れ我等の存在を承認するに十分ではないか。假令生きてゐるといふことは、さまざまの禍を豫期するより外何の能もないにせよ、又その禍なるものが世人の言ふほど大きいものにせよ。

ところが、此問題に就て世人の言ふところは、決して誠實なものではなく、又多くの哲學者の測定も決して正當な測定ではないのである。哲學者が人生の善と惡とを比較する場合には、彼等は常に一切の感覺を超絶した所謂生存の快感といふものを忘れてゐるではないか。又俗人が人生を考察する場合にも、彼等は虚榮心が強くて、死を恐れないと思はれたい許りに、恰度女子の上衣に汚點があつて、其手に鉄を持つてゐる時には、女子は汚點よりも破れ孔を選ぶと同じやうに、彼は生命を譏謗するに至るではないか。

ルソーの眞髓

エラスムスは曰ふ、「一度生活を送つたと同じ條件で再び生涯を始むることを希ふものは尠からう」と。されど斯の如く高調に語らふ人も、若し再び生涯を始め得る見込みがあれば、恐らく其口調を變更したに違ひない。而して斯やうな事を言ふ手合ひは、恐らく似て非なる快樂には飽き足つてゐても、眞の快樂は之を知らず、常に生活に倦んで猶且つ生活を失ふことを恐れる人であらう。元來學問ある人は、總ての階級の中で最も居坐りして、最も不健康で、最も思想的で、随つて最も不幸な人間である。若し彼等よりも體格の好い人、又は少くとも誠實な人を見出さうとするならば、我等は、計畫も野心も無く、世に知られずして平穩な生涯を送つてゐる正直な人、若しくは自己の勞働によつて自ら安樂に衣食する正直な職人、若しくは佛蘭西ならざる他の自由國の農夫を捜すが宜い。此等の人々は最も多數を占めてゐるが故に、我等は先づ此等の人々に聞かなければならぬ。但し佛蘭西は我等を生活せしめんが爲めに、農夫を飢餓に

ルソーの眞髓

迫らめしむる必要があると思惟してゐる國であるから、その農夫は例外である。余は敢て斷言する、アツバー、バレー(瑞西の一州)に住んでゐる山民には、一人として自己の機械的生活に不満なものはない。彼等は、天國に行く代りに、再び斯く絶えず粗食する爲めに生れよと云はれ、ば、一人として喜んで之れに應じないものは無からう。

人生に對する考へは、人によつて斯くも違つてゐる。我等は生命を濫用するが爲に、生命を重荷と考へるやうになるのである。

ケートーは斯う言つた——「余は生れて來たことを悔いない。何となれば、余は無益に生れたものでないといふことを余自身に證明することが出来るから」ど。余は、生れ來たことを悲しむ人々に對しては、ケートーよりも更に不賛成の意見を有するものである。但し古來の聖賢が、自然若くは運命の命令によつて此世を去る時に、不平を言つたり失望したりするのは必ずしも前述の理由の

爲めではないことを斷つて置く。

ルソーの眞髓

死

人間が若し不死不滅であるとすれば、實にみちめであるだらう。成程死ぬといふことは樂なことではない。然し斯ういふ苦しい生活を何時までも永らへるといふことも決して樂なことではない。今生を終つて更に一層立派な生涯に入ると思へば、死は寧ろ喜ぶべきでないか。

現世で不死不滅を得るとすれば、これほど悼ましい特權が又とあるだらうか。苛酷な運命や、不公平な人間生活、これ等の中にあつて、我等は何を頼み、何を望み、何によつて慰められようぞ。

無知蒙昧な人には達觀の力がない。だから彼等は生の價値も知らねば、又死の恐怖も感じない。けれども智者は現世の價値よりも更に崇高な價値が、未來

に存在することを知るが故に、喜んで現世の生活を棄てる。

知るところ淺く想ふところ謬れる人は、死の彼方を見ることが出来ぬ。そして我等の最大不幸は此所から生ずるのである。死の必然は、賢人が人生の苦痛に堪ふる強き理由ではないか。我等が何時か生命を失ふといふことが確かでないとするれば、生存の維持餘りに高價ではないか。

人類は生來自己保存の感覺を有する。これは疑はれないけれども、此種の生命の愛は、大部分人爲のものではない。人は其力の及ぶ範圍内に於て、自己保存の手段の存する限り、生來自己保存を志すものである。そして自己保存の手段を失へば、冷靜になつて、徒らに自己を苦しむること無くして死ぬものである。

斷念の第一の理法は、自然に依つて我等の中に注入されたのである。蠻人は、あらゆる動物と同じく、死に對して争ふこと尠く、殆んど不平を鳴らすこと無

くして死を受ける。此斷念の原理が滅却せられて、始めて他の原理が形成されたのである。而して他の原理とは、理性によつて推定されたものである。けれども此等の原理を如何に使用す可きかを知つてゐる人は尠い。且つ此人爲的斷念は、前者程完全ではない。

人間最大の誤謬は、我等の實在全體を生命に倚るが如く考へ、又死の後には無になるが如くに考へ、餘りに多く生命を重視することから生ずる。我等の生命は神の目から視ればたゞ一瑣事に過ぎない。理性の目から視ても取るに足らない。故に我等の目から視ても亦取るに足らぬものでなければならぬ。身體を剝奪されるのは、唯だ煩はしき衣服を脱ぎ捨つるが如きものに過ぎぬ。

或事件を考へるにしても、考へやうによつて、我等を感動せしむることに多寡がある。又その事件に接近して見れば、初めに見た時の恐怖の大部分は失ふものである。

急速に來る死は必ずしも眞の禍に非ずして、時には却つて差引き善いものである。

リスボンの廢墟の下に滅された人々の多くは、疑もなく更に大なる禍を免れたではないか。又斯の如き不幸は、之を記述すれば、甚だ悲惨なるものであるけれども、然し此等の不幸な人々は、永く苦しい生存の後に、普通の成行きに随つて、終に死に追ひ付かれたるよりも、一層多く苦悶したか否かといふことは、余の斷言するを得ざる所である。

臨終の人が、つまらぬ憂慮に壓迫されたり、多くの公證人や相續者にさまざまの事を問ひかけられたり、醫師に殺されたりする最期より、猶も慘澹な死様が世に又とあらうか。總て天の作せる禍は、我等が自ら招ける禍の半だにも殘酷でないのである。

自墮落な生活で身體を破壊して置いて、我等は藥石を以て再び之を建て直さ

ルソ-の眞理

うと力める。我等は我等の感ずる疾病に加ふるに、我等の恐怖する處を以てする。死の豫知は、死に恐ろしい容貌を與へ、死を促すものである。死を免れようと力めれば力めるほど、反つて強く死を感知するものである。斯くて我等は自然を害して自ら招いた禍の爲めに、自然にむかつて不幸を鳴らしながら、命數の未だ盡きざる中に早く既に恐怖の爲に死ぬる。

自由に生きるといふこと、人類の總ての所有物に適當の價値を附するといふこと、これは如何に死す可きかを知る最善の方法である。

藝術と科學

科學を研究するには種々善き省略法が有るが、わけて研究を一つに限る事は科學を有効に研究する最良方法であらう。

書籍の濫發は、科學を滅却する。過度の多讀は、唯だ高慢な無學の人を作るのみである。書籍は、要するに、人に「我等は何事も知らぬ」と言ふことを訓ふるに過ぎぬ。

人類の理性は進歩するものでない。總て一方で得るものは、他方で失つてしまふ。又總ての理解力は同一の點から出發し、他人の考へたことを學ぶ爲めに多くの時間を使用して、自ら思考する多くの時間を失ひ、多くの知識を得るに反して、一方では天稟の才と想像力を失ふのである。理解力は恰も手の如き

ルソ-の眞理

もので、器具によつて總ての事を爲すに慣れてゐるが、然し夫れ自身では何の役にも立たぬ。器具が精巧になればなるほど、我等の官能は不恰好にも不器用にもなる。我等の周圍に絶えず機械を集めれば、我等自身の中には何物をも見出さなくなる。

心意は肉體と同様欲望を有する。而して此等は社會の基であり、又社會の娛樂の基である。科學や學問や藝術は、恐らく政府若しくは法律よりも專制的でないかも知れぬが、然し此等より却つて有力で、人の荷ふ鐵鎖の周圍に花環を纏ひ、人間生來の自由の情操を花環の中に閉ぢ込め、人をして服従することを愛せしめ、所謂上品な人と稱せられるものと爲らしめる。必要は王位を作り、科學と藝術とは此王位を強固な基礎の上に定めたのである。地上の支配者よ、汝は才能と才能を養成する總ての人とを愛護するが宜い。

上品な人々よ、汝は才能を養成するが宜い。幸福な奴僕よ、汝の驕りとする

優美にして上品な趣味、溫柔な性格、交際を容易ならしめ、且つ之を結合せしめるもの、一口に言へば、何等眞の徳がなくとも、これを有する如くに見えしめる鄭重な行儀、これは皆科學及び藝術に倚るものである。世には、熱も焰も有せず、又善惡の差別に無頓着なるが爲めに、單に柔和な薄弱な、無氣力な人が有る。學問の愛は畢竟此種の温和と無頓着を感せしむるものである。

内部が腐敗すれば、外部は温厚となる。斯の如くにして學問の愛は、徐々に禮節を傳播する。

科學の攻究には危険と迷ひ路が甚だ多い。眞理に達するには、多くの誤謬の前を通らなければならぬのである。誤謬は眞理の量よりも一千倍も多量に危険なるものである。虚偽は種々に結合して變化するが、然し眞理は終始一様である。眞理が不利益の地位に在るは明白でないか。

時間の濫用は大なる不善である。然し學問と藝術とは猶一層死滅的な不善を

生ずる。奢侈は時として科學と藝術とを伴はぬことがある。然し科學と藝術とが奢侈を伴はぬことはない。

人間が未だ無垢で有徳で、且つ神を自己の行爲の目撃者としてゐた時代には、神も人間も共に同じ茅屋に住居してゐた。けれども彼等は直ちに放埒と爲り、神の目撃を厭ふやうになり、斯くて神を壯嚴な宮殿に祭り込んでしまつた。其後人間は神を追ひ出して、自ら其宮殿に居るやうになつた。少くとも、神の宮殿と市民の住宅とは最早何等の區別もないやうになつた。斯くて腐敗は其頂上に達した。罪惡は或る意味に於て王公の宮殿の門戸の飾と爲り、大理石の柱の飾と爲つた。コリンスの柱頭に彫刻せられた時程、罪惡の盛であつたことは未だ嘗つてなかつたではないか。

噫、ファブリシヤスよ。御身若し不幸にして復活し、羅馬の華麗な外觀を見たならば、御身の偉大な心靈は、果して何と考へるであらうか。羅馬は御身が

御身の手で救つたものではないか。御身の尊敬す可き名は、羅馬の總ての勝利よりも羅馬を著明ならしめたものではないか。

あはれ神々よ。御身は下の如く言ふを欲しないであらうか——「以前は適度と徳の住んでゐたあの茅屋、あの田舎の住家は何と爲つたのか。羅馬の質朴の代りとなつた此亡國的華麗は何といふ有様なのだ。此の奇怪な國語は何といふことなのだ。此等の女々しい舉動は何うした譯なのだ。此等の彫像、此等の繪畫、此等の高屋は、何の意味があるのか。愚なる者よ。汝は何を爲したのか。愚なる國民の主よ。汝は自から征服した下らぬもの、奴隸と成り下つたではないか。汝は修辭家に支配せられてゐる。汝の血潮を希臘や亞細亞に撒いたのは、建築家や、畫家や、彫像家や諧謔家を富ましめる爲めであつたのか。カーセーシの分捕品は、笛吹き釣餌であつたのか。羅馬人よ、速に此等の劇場を覆し、大理石を破壊し、繪畫を焼け。死滅的の藝術によつて汝を墮落せしめた此等の

奴隸を放逐せよ。他國の人は無益な才能によつて顯著となるも宜い。然し羅馬に應はしい唯一の才能は、世界に勝ち、徳を以て世界を支配することに在るのだ。サイネヤスが、我等の集會を國王の集會と思ひあやまつたのは、決して何の益もなき華美に眩惑せられた爲でもなく、又熟達せる雄辯に眩惑せられた爲でもない。げに彼は、取るに足らぬ人の娛樂なる區々たる辯舌を聞かなかつた。然らばサイネヤスをして斯くも森嚴に思はせたものは何であつたか。噫、羅馬の市民等よ。彼は、汝の富も、汝の藝術も與ふるを得ざる光景を見たのである。凡そ天下に顯はれた最も美しい光景は、羅馬を指揮し、世界を支配するに足る二百人の人々が一堂に集まつた會合であつたのだ。」

學問の趣味と美術とは、我等第一の義務並びに眞の光榮を愛する心を滅却する。才能が徳に應はしい名譽を奪へばやがて人は各々優雅ならんことを力めて、

ルソーの眞髓

價值ある者と爲らうと力める者が無くなる。斯くして人は、自ら得たものに非ざる性質に對して、酬を受けるといふ他の不條理が生ずる。我等の才能は我等と共に生れたものであつて、たゞ我等の徳のみ我等自身のものではないか。恭敬仁愛は、人を社會に結合するものである。然るに哲學の愛は、恭敬仁愛の結目を悉く弱わめる。これは恐らく最も危険な害惡であらう。哲學の愛は、此害惡の原因である。

研究的興味は、直ちに他の總ての愛着心を無味ならしめる。猶亦哲學者は絶えず人類を觀察することに依つて、人類を其價值に順つて評價するやうになる。然し我等の蔑視する物に對して深い愛情を有することは困難であるのだ。有徳な人は廣く人類を愛する。然るに哲學者は此愛を狭く自己の一人に集めるやうになる。哲學者の他人に對する輕蔑は、哲學者の誇には都合が善い。又哲學者の自愛は、彼が宇宙一切物に對する無頓着に正比例して増加する。家族や國は

ルソーの眞髓

哲學者には意味のない言葉である。哲學者は親にも非らず、市民にも非らず、又人にも非らずして、たゞ哲學者である。

科學の研究は、幾分か哲學者を追ひ除けてしまふ。然しその代りに學者の群を造つてしまふ。斯くて科學者も、哲學者と等しく徳に害が有る。愉快な科學の研究に専らな人は、皆自ら楽しみ又賞讃せらるゝことを望む。他の人々よりも一層賞讃せらるゝことを望む。科學者は公衆の賞讃を以て彼自身にのみ屬するものと考へてゐる様に想はれる。それどころか彼等は、競争者が賞讃を博することを妨害しないにしても、少くとも賞讃を得んが爲めには總てのことを爲すものである。

是に於てか一方に於ては趣味文雅の精鍊、下品卑劣な阿諛、騙誑口説、兒戲的な所業が生じ、遂に心靈を腐敗せしめ、心情を頹廢せしめる。他方に於ては嫉妬、競争、知名な藝術家の憎惡、不信義、誹謗、詐欺、逆撃、其他あらゆる

賤しく厭ふ可き害惡が生ずる。哲學者が人々を輕蔑するとすれば、藝術家は人に輕蔑せらるゝものと爲る。雙方とも人類を賤しむ可きものとならしめる點に於て相一致する。

知識は一般人の爲めに作られてゐるのではない。科學者は絶えず攻究しながら永久に迷ひつゝある。假令科學者が時として彼の求むる處を見出すことが有つても、その見出せるものは常に科學者に有害である。彼等は働き考ふ可く生れたのであつて、反省す可く生れたのではない。反省は科學者を一層善く一層賢ならしめることはなく、單に彼等を不幸ならしめるのみである。反省は科學者をして過去の幸福を惜ましめ、現在の悦びを享けることを妨げしめる。それは空想を以て科學者を誘ひ、希望と未來の不幸によつて科學者を苦しめ、見越と思案に依つて彼に不幸を感せしめる。反省は未來の不幸にも苦しましめる。學究は科學者の道徳を破壊し、健康を害し、體格を滅却し、又屢々理解力を損

ふ。よし學究が何物かを教へたにしても、その報酬は甚だ不足な酬いであることは疑へない。

卓越せる天才は眞理を被ふ面覆を徹して眞理を見ることが出来る。彼等は虚榮の恐なること、嫉妬の陋劣なること、其他學問の愛によつて生ずる總ての情慾の邪惡なることを知る。而して此種の人のみ、眞に人類の光にして又名譽である。此等の人のみ、全體の人の利益の爲めに研究す可きものである。然し此種の人は實に僅少である。又僅少で宜いのである。若し人が皆ソークラテスであつたとすれば、知識は總ての人に有害でないとしても、少くともそれは不必要でなければならぬでないか。

或種の人を腐敗せしめた物が、一層大なる腐敗を防ぐことが屢々ある。不注意に藥石を使用して自己の身體を損じた人は、其の生命を保持せんが爲めに再び醫師を頼まなければならぬ。同様に、藝術と科學が罪惡を成熟せしめたとい

ふことは、即ち罪惡が犯罪と爲ることを防ぐの役を勤める。藝術と科學とは、少くとも上塗りを以て罪惡を覆ふものである。そしてこの上塗りは、毒物の自由を發散することを防ぐものである。藝術と科學とは假令徳の外形を保持するにしても、實は徳を滅却し、徳の代りに禮節と作法とを齎らすものである。藝術と科學とは馬鹿らしく見えることを恐れるけれども、悖徳に見えることを恐れない。

母が其子の手から危険な器具を強奪するが如く、自然は汝等を保護して學問せしめざらんことを欲するものである。自然が汝に知らしめざる總ての秘密は取りも直さず自然が夫れ丈け多くの害毒から汝を保護するものである。人間が學問に於て發見する困難は、自然の親切少きが爲めではない。

學者

學者の大多數は、小兒が知識を收得するが如くに知識を收得する。廣大な學識は概ね幾多の圖形の結果であつて、觀念の結果であることは尠い。或書中に書いてあつたことでも、ページの右若くは左に在つたといふこと、又我等の見たものは如何なる外觀の下に初めて我等の視界に表はれたかと云ふこと、之を知ること無くしては、我等は此等のもの、何れをも想起することが出来ぬ。斯の如きが前世紀に流行せる學問の方法であつた。現代の學問は是れと大に異つてゐる。今日の學者は、攻究もせず、又觀察もせず、唯だ夢を見て、そしてその夢を哲學の代りに眞面目らしく提供する。余も亦同様に夢みてゐると云はれるかも知れぬ。これは余も認める。唯だ余は夢の代りに夢を與へる。そして、

余の夢の中に覺めた人に有用のことが有れば、たゞこれだけを讀者に提供しようとするのみである。

大天才が人を教へるのは正當である。俗人は天才の教訓を受けなければならぬ。各人若し自ら教訓するならば、誰も天才に聴くものがなくなるだらう。モンテーヌ曰く「跛者は身體の運用に適せぬ。心意の跛者は智力の運用に適せぬ」と。ところが今の時代に於ては、跛者が他人に歩行を教へてゐる。今の世に於て、哲學者の書類を研究する人は單にその哲學者を研究するのであつて、自己自身を教へんが爲めに此等を研究するのではない。これほど愚人の多かつた時代は、未だ嘗つてないのである。抑も學問は、之れを修めんとする人に取つては、貨幣の如きものである。普通の人は、貨幣そのものに大なる價值を附けてゐるけれども、然し本來を言へば、そは之れを通用するに比例して單に幸福を傳達するもの、唯だ通用する間のみ善なるものである。學者から名聞利達の心

を取り去つて見よ。さすれば彼等は學問の收得に冷淡となるだらう。學者は、公衆に撒布する爲めにさまざまの見解を其の密室に集める。彼等は單に人の目に賢く見えんことを欲するのみである。若し學者を賞讃する者がなければ、攻究も彼等には無味であらう。セネカは曰ふ、「我れ若し知識を見せびらかさざる條件の下に、知識を與へられたならば、我は知識を受領しなかつたらう」と。卓越せる哲學よ。汝の起源は此處に在るのだ。

あらゆる知識の愛に捕はれ、其艶麗に惑はされて、自から苦しみ、停る可き所を知らず、絶えず轉々する者を見る時、余は海濱に於ける小兒が、貝殻を拾つて其荷を重からしめ、更に尙ほ其後に見付けた他の貝殻に誘はれて、擲げては拾ひ、拾ひては擲げ、終に全く數の多きに呆れ、最早や何れを選び、何れを捨つ可きかを知らずして、總ての貝殻を捨て空手に歸るものと思はざるを得ない。大哲學者は、多くの科學的知識を所有してゐると考へてゐながら、實は何事

をも知らない。之に氣が付けば彼等は驚嘆するだらう。ソークラテスは、自己と他人との差異は、「我は何事をも知らず」と云ふことを自認するに反して、人々は之れを自認せざる點に在ると云つたが、今の世の多くのことを知つてゐると思つてゐる人が、實際の自分を知れば恐らく驚くだらう。然し若し斯んなことが實際起つたとすれば、彼等が驚嘆するよりも、余は猶驚嘆するだらう。

才能

自然は、人間の階級に關するところなく、種々の部門の爲めに種々の才能を人間に興へたる様に見える。才能よりも優れたものは二つある、一は道德にして、他は幸福である。人は單に他人の道具として使はれるには餘りに高尚な者である。故に誰しも自分の便利と云ふことを考へないで、矢鱈に他人の便宜の爲に使役せられることは無い。人は地位の爲めに作られたのではなく、地位こそ人の爲めに作られたのではないか。随つて人を出来るだけ善と幸福に爲すやうに事物を適當に分配するには、人が事業に適するか否かを注意することなく、事業が人に最も爲めになるか否かと云ふことに最も大なる注意を拂はなくてはならぬ。他人の便宜の爲めに、人の心情を損ふことは、許す可からざることである。

ある。又正直な人の役に立てんが爲めに、人を無頼の徒とならしむることも許す可からざることである。

天賦の才を發達させるには、先づ之れを熟知しなければならぬ。然しそれだけの天賦の才を見別けるのは容易の業ではない。兒童の性癖を最も善く研究した後でも、猶且つ其兒童の天才を見別くるに困難ではないか。況んや教育を閉却せられた人は、如何にしてか自己の天賦の才を見分けることが出来よう。嬰兒の時に興へられた傾向ほど曖昧なものはない。これは往々天才よりも寧ろ摸倣の結果である。自然の傾向よりも、寧ろ機會に倚るものである。又此傾向と雖も、常に眞の性癖を指示するものではない。

眞の才能や眞の天才には一種質朴な所が有る。その爲に天下は不安になることが少く、心の騒ぐことが少く、又皮相的にして似て非なる天才の如く自己自身を熱心に表はさうとしない。皮想的な似而非天才は、成功するを得べき何等

の方法も無くして、只管光輝あらんとする生意氣な希望を懐く。斯くの如きものは、大鼓の音を聞けば大將たらんことを欲し、人の建築するを見れば忽ち自ら建築家となることを想像する。我等は才能を以て生れた。そして唯だ物質的に出世せんことを希つて、深く自己の内心を見ることをしない。こは眞に自然の秩序であらうか。

誰しも自分の天才的傾向を發見して、之れを追及しようとして希望するが、然し眞に之を爲し得る者は誠に尠い。多くの人々は不正な障害物を乗越ゆることが出来ぬ。價值なき競争者を征服することも出来ぬ。自己を信頼すること大なる人々は、援助と詭計と隠謀とを輕蔑する。自己の弱點を知るものは、援助と詭計と隠謀とを求めぬ。

藝術獎勵の幾多の制度は、藝術に有益なところが却つて之に有害である。題目を思慮無く増加するは、題目を混合するのみではないか。眞に功績ある者は群衆から隠れ、最も巧妙なものに相應はしい名譽は、最も奸計を廻らすものに與へられるのである。

仕事と階級とが各個人の才能と功績とに恰度よく比例するやうな社會が在れば、各人は其席を占むるに最も適當だと感ずる所を熱望するだらう。

けれども今の社會に於ては、我等の才能の中で唯だ最も拙劣なものを修業させてのみ幸運を得ることが出来る。故に我等は上述の方法よりも一層確な方法によつて我等自身を導き、又才能の受く可き報酬をも排けなければならぬ。

各種の才能を悉く發達させなければならぬといふことは、信せられぬ。若しさうであれば、才能を有する人の數と社會の要求とは精密に比例する必要があるでないか。若し唯農業に拔群の才能を有する人のみ地を耕すことを許され、又他の事業に一層適當だと考へられる人々を農業から取り去るならば、地の耕作と我等の生活とに十分な丈けの労働者が足らなくならう。

人々の所有する才能は、徳乃至藥劑の如きものである。よし自然最後の目的は、我等をして此等を要しないやうにするに在るとしても、自然は我等の不幸を軽減せんが爲めに我等に此等を與へたのである。植物には、之れを喰ふ動物を毒するものがある。同様に才能にも、亦有害と爲るものがある。若し總ての物の主特質に随つて總ての物を使用しなければならぬとすれば、我等は恐らく人類を益するよりも寧ろ人類を害するに違ひない。

元始的質朴の状態に在る民族、善の状態に在る民族は、斯く多くの才能を必要としない。此等の民族は、他の民族が工業を以て自己に供給するところを、質朴を以て一層善く自己に供給する。然るに彼等が漸次墮落するに随つて才能が表はれる。此等の才能は、彼等の愛する徳の代りと爲り、悪人と雖も有用となるの止むなきに然るのである。

趣味

善とは唯だ美の活動せるものである。善と美とは密接なる關係を有し、共に自然の同一の根源から出てゐる。随つて趣味は、智慧と同じ方法にて發達し、道徳の美を感知する心は各種の美をも等しく感知せざるを得ない。

我等は感情を練磨するが如くに視覚をも練磨する。否寧ろ極美の視覚は、優しく美しい感情に外ならない。故に畫家は美しい景色又美しい繪畫を見る時、俗人に認められぬ物を認めて恍惚となる。世には趣味のみによつて決定せらるる名も無きものが澤山にある。

趣味は或る意味に於て判断の顯微鏡である。そは極微物をも判断することが出来、且つ此等の物の働きを停止する。

然らば如何にすれば趣味が発達するか。外でもない、我等は感情を練磨するが如く視覚をも練磨し、感じに依つて何が善なるかを判断するが如く、鑑定によつて何が美なるかを判断して、趣味を発達せしめなければならぬ。

趣味の意義は、解釋せんと力むれば反つて益々迷ふ。が兎に角趣味は人類一般を悦ばしめるもの、若しくは不快ならしめるものを判断する唯一の才能であると言へよう。我等が趣味に就て知る所は是れだけである。然し、それだからと言つて趣味の人は趣味なき人よりも多いとは云へない。群衆は總ての事物を賢明に判断することが出来ても、一個人では夫れ程賢明に判断し得るものは尠いではないか。又總體の趣味は好い趣味であつても、個人として好き趣味の人は尠い。それは恰も最も普通の容貌の人でも、集合すれば美しいけれども、離してみれば美しい人が尠いと同一である。

趣味上の愛憎は、必ずしも有用だから愛するのでもなく、又有害だから憎む

のでもない。趣味とは、利害なき事物に就てのみ言はるゝものである。少くとも我等の娛樂に關するもので、實際的欲望に關するものではない。實際的欲望の判断には趣味の必要は無い。唯だ欲望と傾向とで十分である。簡単な趣味の判断も困難であり、又外見上出駄目らしく見えるのは實に此處に存する。我等は物質上の趣味の法則を識別するが如く、精神上の趣味の法則をも識別しなければならぬ。精神上の趣味の原理は到底解釋し得ないやうに想はれるが、然し余の見によれば、精神上の考察は主として模倣に倚るものである。だから物質的に見えても、實際は物質的ならぬ美をも我等は解釋するのである。趣味には又地方的法則が有つて、數多の事物に對する趣味は氣候、道德、政府、制度によつて違ふことが多い。又年齢、男女、性格に倚る趣味の法則あることをも附言しなければならぬ。而して斯の如き事物に對しては、趣味の論議を闘はすべきものではない。

趣味は生來總ての人々に在る。けれども皆同じ程度に生得してゐるものでもなく、又總ての人に同様に表はれるものでもなくして、各種の原因に依つて總ての人々に差異あり易いものである。趣味の程度は多く感情の發達如何に倚り、趣味の進歩と趣味の形式は社會の如何に倚るものである。趣味を發達させるには第一に、多くのものを比較する機會を有せんが爲めに、大きな社會に生存する必要がある。第二に、怠惰と歡樂の社會に住む必要がある。事務の社會、利益の社會、若くは歡樂無き社會は、人の注意力を奪ふから趣味は發達しない。第三に、不幸等の多からざる社會、意見の横暴も餘りに烈しからざる社會、奢侈が虛榮よりも多く行はるゝ社會に住む必要が有る。なせなれば、此反對の場合に於ては、流行が趣味を壓倒し、快的な物を欲求せずして、唯だ際立つたものを欲求するやうになるからである。

最善の趣味は多數人の趣味であると云ふことは、此の場合に於ては最早正し

い批評とは言へぬ。蓋し趣味の目的物が變更すれば、群衆は趣味に就いて最早自己自身の判断を有しないやうになり、彼等は彼等自身よりも聰明だと考へる人々をして、彼等自身の趣味の判断を導かしめるではないか。彼等は善いものを承認するのではなくて、他の人々が承認したものを承認するに過ぎぬ。各人をして常に其人自身の爲めに判断せしめよ。さすれば物それ自身で最も快いものが、常に最も多く賛同せられるだらう。

人の作物の中で最も美しいものは、皆摸倣の結果である。眞の模範は皆自然に在る。教師即ち自然から離れ、ば離れるほど、我等の作物は美しくない。我等は我等の眞に愛する物よりも我等の模範を採るやうになる。斯うなれば、無定見と世評に従ひ、指導者の嗜好に迎合するやうになる。

趣味の指導者は、藝術家や高位高官の人や富豪であつて、此等の人には本能と虚榮心に依つて導かれる。富豪は自己の富を見せびらかさんとし、他は是れに

依つて利益を得んとして、互に贅澤な新形の發見を競ふ。斯くて奢侈の力は己れの王國を建設し、我等をして最も珍奇にして高價なものを愛せしめるやうになる。斯る場合には最も美しいと稱せられるものは、自然の摸倣を遠ざかつたもの、却つて自然に反したもので、唯だ美であると迷信せられるのみである。斯くの如く奢侈と惡趣味は離る可からざるものである。入費を多く要する趣味は必ず誤れる趣味である。

男女の交際は、善かれ悪かれ、我等の趣味を助成する。趣味の進歩發達は、男女交際の目的の必然的結果である。けれども享樂が容易になれば、樂みの欲望は減少する、趣味は墮落する。故に善い趣味は必ず善い道徳に伴ふ。

趣味は往々デリカシーの爲に墮落する。一般の人々に依つて見出されざる小事をも、我等をして感知せしめるものは、此のデリカシーである。そは我等を議論好きにさせる。蓋し精微に互れば、夫れ丈け議論の餘地が多くなるからで

ある。精密といふことは感情を益々デリケートにするけれども、感情を一樣ならしめることは尠い。斯くて人々の存在する丈け夫れ丈け多くの趣味が成立し、又何れを正當に選ぶべきかといふ論議は、哲學と知識の進歩を來たす。斯くして、唯だ世間の識者のみよく爲すを得るやうな鋭敏な觀察をも考へるやうになる。而して此等の觀察は最も不明なものなるが故に、大きな社會に能く馴れぬ人は、顯著な狀況に目を奪はれて、此等のものを見る事が無い。

現今文明國に於て巴里程一般に趣味の墮落した所は無からう。けれど亦善い趣味の養成せらるゝ所も矢張り巴里である。歐洲に聲價を博する書籍は、大抵巴里で趣味を養成せる人に依つて書かれてゐる。尤も唯だ巴里で書かれた書籍を讀めば十分だと云ふのではない。作家の書けるものよりも、作家の會話に於てこそ、我等は多くを學ぶことが出来る。又作家とても、我等の最も多く學び得るものではない。思考的精神を啓發し、觀察力を發展し得る丈け發展させる

ものは、社會の精神である。天才の極少の焔だに有する人は、巴里に行つて一年を費せ。さすれば、その人は自分の心に潜在する趣味の力を悉く活かすことが出来る。若しそれでも生かすことが出来ねば、その人は到底物にならない。

世に質朴な趣味がある。此等は唯だ古人の文書に於て發見せられる。古人の文書は、美辭、詩歌、其他の文學並に、歴史に對するさまざまの知識と健全な判斷力に富んでゐる。是れに反して現今の作者は、言葉數多くして意味は甚だ尠い。作家の判斷を永遠の規則とするは、我等の判斷を形成する所以ではない。古代と近代の趣味の相違は、總ての作物に於ても、乃至墳墓に於ても之を見ることが出来る。現代の人々は讚辭を墳墓に浴びせかけ、古代の人々は事實を墳墓に彫り附ける。

“Ita victor heroem calans.”

『停れ。旅人よ。汝は英雄を踏むなり。』

こんな牌文が古びた石碑に書かれてゐたとすれば、余は直に是れは近代のものであると推測する。現今に於ては英雄ほど有りふれたものは無いが、古代に於ては甚だ稀である。古人は、或人が英雄であつたと云ふ代りに、其人の行つた英雄的行爲を人に告げる。上の英雄の碑文と、優しいサルダナバラスの碑文とを比較して見よ。

『我はタルサスミアンキヤレスを一日に建てたり、而して今我は死せり。』

兩者の何れが最も意味深だらうか。現今の碑文の文體は、唯だ大言を以て一寸法師を頌揚するに過ぎぬ。古代の人は、人々の有りの儘を表はし、又他人が此等の人の人となりを見得る様に表はした。クセノホンは一萬人の軍勢が退軍した際、反逆人の爲に殺された或武人を賞讃して斯う言つてゐる。

『我等は戰に於ても信義に於ても批難すべき事なくして死せり』と。僅にこれだけである。此簡単な賞讃のうちに、クセノホンの心に溢れてゐた情を考へて

見よ。此妙味を解すること能はざる人は憐む可き人間だ。セレモビレーの石碑の銘に曰ふ。

「旅人よ。行きてスバルタに告げよ。我等はスバルタの神聖なる法律に随ひて、此處に死せり」と。

之れを作つたのは碑銘學校でないといふことは一眼で知れる。

ルソ-の眞髓

想像力

感覺直接の力は微弱で限り有る。最大狼藉を行つた感覺は皆想像力を混じたのであつた。自然が欲望の目的物を飾るよりも、想像力は猶多く此等の目的物を飾つて我等の欲望を刺戟するのである。想像力は事物を赤裸に表はすのみならず、以前には覆はれたものとして耻かしさうに暴露する。

如何に控目な着物でも、其着物を通じて見た一瞥は、必ず想像力を燃して欲望を起させる。支那の北京の少女が、唯だ被はれた足の先きを突き出せば、美しい少女が全く裸體でタイゲタスの堤上に於て舞踏するよりも有効であらう。

最早何物をも望まざる人は不幸である。其人は、或る點から云へば總てのものを失つたと同じである。我等は我等の得たものを樂しむよりも、望むことを

ルソ-の眞髓

樂しむものである。故に我等は所謂幸福になる前にのみ眞に幸福であるのだ。人間は熱心であるけれども、然し其力には限りがある。總てのものを望むでも僅のものを得る様に作られてゐる。故に人は其欲する物を其人の達する範圍内に齎し、之れを想像力に委ねて、現實とならしめ、之れを感知せらる可きものとならしめる力を天から授かつたのである。而して或點より云へば、此力は欲望に總ての物を與へる。又此力は、此等の架空の財産を猶一層望ましからしめんが爲めに、此等のものを其人の希望に随つて變形させる。けれども此の眩惑力は、實物の所有者の目からは消え去つてしまふ。我等は我等の現に見つゝ有るものを心中に描くこと無く、我等の持てるものを想像によつて裝飾することが無い。幻影は享樂の起る時に消滅する。何事も慣るれば想像力を滅却し新奇のものは想像力を再燃せしめる。我等の日々見る所のものには想像の必要無く、唯だ記憶を要するのみである。

ルソーの眞髓

ab assuetis non fit passio. 「情熱は慣れた物より起らず」といふ格言は是れから来る。情熱は想像力の焰のみにて燃されるものである。

我等に印象を残した物と、我等の得た觀念との回顧は、欲望物其物よりも遙かに人の心を誘ふ心象を心に起させる。此の回顧の念は、常に獨居する人に入用である如く、常に此等の觀念に壓迫される人には堪へ難いものと爲る。想像力が一度び汚されば、總てのものは皆恥辱と爲る。想像のほか何の善い物も残らないやうな人は、努力を倍加して想像の念を保持しようとする。想像の念は欲望を飾るものであるが、然し欲望の目的物を所有すれば、欲望を棄てしまふ。獨立自存の神の外は、美は皆架空的でないものはない。

限り有る實在者の存在は、憐むべく無法なものであつて、眞に其有りの儘を見れば到底此等を愛することは出来ぬ。空想は實在を飾る。若し想像力が、我等の感知するものに美しさを加へなかつたなら、我等の受くる快樂は殺風景で

眞の-ツル

我等の官能に限られ、常に心情をして冷かならしめるより外なかつたらう。

悲しい出来事は段々に發表するといふのが一般の習慣であるが、或人は活潑熱烈な想像力を有し、一言を聞いて直ちに最も不幸なことを前知する。故に此等の人々には、後に慰めを施さんが爲めに、一舉して其人々を覆す方が宜い。

ルソ-の眞體

意見と豫知

意見は世界の女王である。而もそは諸王の旗下に在るに非ずして、諸王自身が此女王の主だちたる臣下である。何事も意見に随はないといふことは、何事も權威に随はないといふことと同じで、到底出来ることでない。我等の誤謬の最大部分は他より生ずるものであつて、自己自身から生ずる事は極めて少い。意見に超越するには、嘲笑に一切無感覺にならなければならぬ。

取越苦勞といふものは、絶えず我等を力の及ばぬところに持ち出し、往々我等を我等の達するを得ざる所に置く。これこそ總ての不幸の眞の源力である。人間の如き短命な生物が、永久に達することの出来ぬ遙かの未來を臨み確實な現在を閑却するといふのは、何たる狂氣であらう。而も此狂氣は年齢と共に増

ルソ-の眞體

長して益々絶望的になる。老人は常に疑ひ深く、貪慾で、取越思案に満ちてゐるが故に、百年後に於て不足を感じるよりも、寧ろ今日必要なものを省かうと欲する。斯の如く我等はすべての物に執着する。我等自身を鎖で萬物に繋ぐ。時間、空間、事物、總て我等の重するもの、總て我等の重じ得るもの、此等すべてに我等自身を結び付ける。そして我等個人が存在は、最も尊敬せられぬものと爲る。斯くて人間は誰でも、一方から云へば、自己を地球上全體に擴げて、此大なる表面の總てに神経を費すに至るのである。そして何れの點を負傷しても、我等の苦痛が増加する。未だ嘗つて親しく見たことの無い國を失つて、自己自身を苦しむる王公が、どれほど多いことであらう。巴里にゐながら、印度のことに就いて自己自身を悲しましめる商人が、幾らあるか知れぬ。

人間を其人自身から斯くも遠く運び行くのは、自然其物であらうか。自然に總ての人をして自己の運命を他より學ばしめ、又時としては最後に運命を聞か

しめるであらうか。我等が實物に就て知ること無く、幸福に又は不幸に死し得る所以のものは取越思案ではなからうか。

爽快な快活な、元氣旺盛な健康な人の臨席は、喜びを感せしめ、其人の目は満足と平和とを宣言し、其人は常に幸福の書のやうだとする。

郵便配達人が手紙を持つて来る。そして其幸福な人は之れを見る。手紙は其人宛のであつた。で其人は之れを開いて讀む。其瞬間に彼の様子は變り、彼は青ざめ、地に卒倒する。蘇生しても、彼は混乱し、泣き、呻き、髪を巻る。彼は叫んで、其の周圍の空氣を共鳴させる。彼は恰も恐ろしい痙攣に罹れるやうである。噫、愚な人よ。其紙が汝に何の害を爲したのか。汝の四肢でも取り去つたのか。其紙は如何なる害を汝に爲したのか。其紙は、汝を今の状態に至らしめるほど、汝の何を變化したのか。

若し此手紙が失はれるか、それとも或る慈善家が之を火に投じでもしたら、

幸福と不幸とを混じたやうな此人間の運命は、恐らく奇異な問題であつたらう。彼の不幸は實際あつたのかも知れぬ。それは本當であらう。けれども彼は之れを感じなかつた。彼の幸福は架空的であつた。健康、快活、幸福、心の平和、此等は單に幻影に過ぎなかつた。我等が死んで了へば我等は存在しないではないか。我等の生命が尙現存するとすれば、何故我等には斯く死を怖るゝ必要があらうか。

嗚呼人間よ。汝の存在を汝自身に限れ。さすれば汝は最早不幸ではないであらう。汝と多くの實在者との連絡に於て、汝は自然が汝に割り當てた場所に居れ。さすれば如何なる有力者と雖も、汝を其處から去らしめることがないであらう。

嚴酷な必然的法則に反抗してはならぬ。是れに反抗しようとして汝の力を浪費してはならぬ。汝の力は、汝の生命を延長せんが爲めに、自然から與へられ

ルソ-の眞髓

たものではないのである。自然は、欲するがまゝに又欲する間のみ、汝に此力を保持せしめるのである。汝の自由、汝の力は、汝の自然力の外に一步も及ぶものではない。其の他のものに至つては、皆唯だ奴隸的狀態と幻覺とのみに過ぎない。

権力も政權も、意見に固着する時は、奴僕の如きものである。人は皆偏見に従はなければならぬ。汝若し汝の欲するが儘に人々を支配せんとすれば、先づ人々をして其の欲するが儘に汝自身を支配せしめなければならぬ。

若し彼等が其の考へ方を變ずれば、汝は汝の行ひ方を變じなければならぬ。汝の周圍の人々は、唯だ汝が汝の支配の下に在ると想像する者どもの意見、汝を左右する汝の寵臣の意見、汝の家族の意見、若しくは汝自身の意見を知る必要があるだけである。此等の老臣、此等の臣下、此等の僧侶、此等の兵士、此等の近侍、此等の庶民小兒は、假令汝が天才テミストクレースであつたとして

眞髓の-ソル

も、汝を小兒の如くに導くだらう。汝は宜しく汝の欲する所を爲すがよい。然しそれにしても、汝の眞の權威は汝の眞の才能以上に及ぶことがない。汝が他の目で視る間は、汝の意志は彼等の意志によつて支配せられざるを得ないのである。

汝は、傲然として、我が人民は我が臣下であると云ふかも知れぬ。又それに違ひなからう。然し汝は果して何であるのか。多くの老臣の臣下ではないか。而して多くの老臣自身は何であるのか。彼等の秘書官の臣下、彼等の情婦の臣下、彼等の侍者の侍者ではないか。總てのものを奪へ。總ての物を僭奪せよ。手一杯に金錢を撒き散らせ。砲臺を起せ。絞臺と拷問の具とを立てよ。法律と命令とを發布せよ。間諜、兵士、刑の執行者、牢獄と鐵鎖とを倍加せよ。汝、憐む可き小人よ。總べて是れは何の甲斐が有らうぞ。斯くしたところで、人々は寸毫も多く汝に服従することはあるまい。欺かるゝことが寸毫も尠くなるの

でもあるまい。又益々専制となるのであるでもない。

汝は常に「我は欲す」と云ふかも知れぬ。然し實際は常に他人の意志に従はざるを得ないのである。

有所有權作

不許

大正三年六月二十九日印刷
大正三年七月二十一日發行

著者	松本 銈
著者	原正 男
發行者	株式會社南北社
右代表者	尾後 家 省 一
印刷者	東京市麹町區有樂町二丁目一番地 中村 政 雄
印刷所	東京市麹町區有樂町三丁目一番地 報文社

定價金
八金

發行所

東京市牛込區區通寺町十四番地
株式會社南北社
電話番町三八〇四
振替東京一九四

片上伸先生著

生の要求と文學

四六判約五百頁
箱入新裝幀
定價壹圓廿錢
小包送料十錢

讀賣新聞評——藝術及び人生に對して、著者の如く敬虔謙讓の念を持して居る人は少ない。自己省察と新生活の創造に精進努力する又著者の如きは眞に罕である。

此の一番の何れを讀むも、意義深き生の動搖と新しき理想の閃影を認めざるを得ない。著者の心は轉て我等の心である。然れども先覺の著者に依りて、我等は暗きより明きに導かれ、自らの心の在所をも知らせられるのである。此の點に於て我等は感謝の念の油然而たるを覺える。尙又此等の思想を表白せる著者の文章は正に一種の詩で、自由に鮮新に、自ら拓きたる境地を自ら行くの概がある。要するに此の書は近代人の内生活を明々地に語れると同時に、新文學發達の運路を詳述したるものである。創作にして評論である。停滯せる心の勇躍を欲するもの、生の不安に目くるめける者は、必ず一本を求めよ。裝幀清洒、恰も著者に對するが如し。

忽四版

法學博士
浮田和民先生著

新道德論

四六判約三百六十頁
箱入裝幀頗美
定價壹圓
小包送料八錢

時事新報評——世の進歩に伴ひて個人對個人、又は社會對社會の軋轉彌々其の度を加へ、殊に物質的文明の最も進歩發達せる所に於て道德上の疑惑を生ずること益々甚し。而も是れ實に一國民の據つて起つべき唯一の綱條にして、是れなくんば世道の歸趨紛々として殆ど瓦崩潰滅に瀕せざらんとするも得べからざらんなり。現代は即ち其の時なり。曰く道德は國家の保護を受くべきものか、道德と宗教との關係は如何、道德は藝術と調和すべからざるものか、目下に其の論結と研究を待つべき問題に讀者先覺の面前に向つて雨の如く殺倒するものあるべし。浮田博士は學東西に亘り學界の權威たり。茲に平日の蘊蓄を傾倒して一々此等の疑問に明快なる解決を與へ、在來の舊習を超越して別に一道の新道德を樹つ。立論堂々理路整々として、徹頭徹尾聽くべく味ふべき近來の快著である。自分自身の教養に努力する青年、又他の子弟の教養に身を委ねる教育家は是非一讀せなければなるまい。

忽六版

「建築と裝飾」社編
臨時擴大號

埃及藝術號

專門大家執筆
四六倍判洋裝優雅
定價八角六拾錢
郵稅六拾錢

再版

埃及は世界の藝術的寶庫である。數千年後の今日に於て、一塊の木片、一片の瓦石にも尙ほ貴重なる藝術の生命は脈搏を打ち、美術家建築家工藝家文學家は固より一般趣味の人々が憧憬の藝術、渴仰の殿堂とされて居る。本號は此の偉大なる埃及を紹介する爲に眞摯なる藝術的注意を以て編まれ、三色版コロタイプ版寫眞版等挿畫實に百數十、一として天下の珍ならざるはない。一度本號を讀まば身親しく古代藝術の淵源に入りたるが如く、往復去るに忍びざるの感がある。

「建築と裝飾」社編

埃及藝術圖解

第一輯—第四輯全百葉
四六倍判極上質紙
各輯價美廉賦
定價每輯六拾五錢

最新刊

世界的寶物たる埃及の藝術を紹介したい目的から眞摯なる藝術的注意を以て編まれた。珍重なる「埃及藝術號」は未曾有の歡迎を受けて忽ち再版を發行した。然るに其の後更に埃及藝術の味ひを研究せんとする人々から更に多くの實例發行の要求が續々として申込まれた。此の盛なる要求に應じて發行するの爲に、本號の編輯を一新し、三色版コロタイプ版を以て成り、埃及の繪畫、彫刻、建築、工業等總ての方面に亘つて代表的傑作を網羅した。蓋し古代埃及の藝術の完全なる全集は此の圖解を讀んで他にあるまい。

全國各帝國大學
六學士共著

赤門生活

四六判約三百四十頁
裝幀斬新極美
定價金八十八錢
小包送料八錢

やまご新聞評——赤門出の若い六名の學士が、相會して過ぎ去つた大學時代の追憶談でもするやうな氣分で東京帝國大學内外の事情を忌憚なく赤裸々に描寫したものである。「日本最高の學府」から「戀の赤門」まで息もつがずに讀み了させる。そして讀んで行く内には東京帝國大學といふ一種の空氣がふくよかに現れて、溢るゝ許りの興趣を覺えしめる。殊に此の書の長所は六名の異つた學科出の著者等が各自の分科を擔當して臆面もなく如實に筆を行つた處にある。正しい意味に於ける赤門及び其の學生生活を知らたいと思ふ人、又は一般學生に取つては好箇の讀物である。附録として京都、九州、東北の三大學をも加へてあるから、此等を比較して見ると更に別種の面白味を感ずる。

三版

やまご新聞評——赤門出の若い六名の學士が、相會して過ぎ去つた大學時代の追憶談でもするやうな氣分で東京帝國大學内外の事情を忌憚なく赤裸々に描寫したものである。「日本最高の學府」から「戀の赤門」まで息もつがずに讀み了させる。そして讀んで行く内には東京帝國大學といふ一種の空氣がふくよかに現れて、溢るゝ許りの興趣を覺えしめる。殊に此の書の長所は六名の異つた學科出の著者等が各自の分科を擔當して臆面もなく如實に筆を行つた處にある。正しい意味に於ける赤門及び其の學生生活を知らたいと思ふ人、又は一般學生に取つては好箇の讀物である。附録として京都、九州、東北の三大學をも加へてあるから、此等を比較して見ると更に別種の面白味を感ずる。

早稲田大學 十二學士著 **早稻田生活**

四六判約四百六十頁
裝幀斬新極美本
定價金壹圓
小包送料八錢

三 版

國民新聞評——早稻田大學十二名の學士が母校に對する熱愛の精神を以て、私學の爲めに沖天の氣焔を揚げたものである。學問に國境は無いとは三十年來平民主義的人道主義的自由思想を主張して來た早稻田のモットーであつた。而して今や名實共に我學界の覇者として盛に人材を供給しつゝある。斯くの如く歐米有數の大學と比肩して致て遜色のない早稻田の校內、校外の生活を熱烈痛快の筆を以て描出したものが即ち本書である。評者は未だ曾つて斯くの如き壯快な著書に接したことはない。官學か私學か、これ近年學界の大問題である。憶ふに私學の爲めに沖天の氣焔を吐いて居る本書は、亦一面に於て正に官學私學の問題に對して大斷案を下したものである。滿天下の學生たるものは須らく三讀すべく、吾人は更に一般人士に向つて其の子弟の爲めに強いて必讀を勧める。

菱沼哲之介先生著 **日蓮宗高僧傳**

菊判約三百三十頁
洋裝頗美本
定價金八十錢
小包送料八錢

大 好 評

幾度か兵火に包圍せられ、幾度か白刃の下を滑り、幾度か孤島に流され、凡ゆる苦難に遭ひながら、妙法華教弘布の爲めに七字の題目を眞甲に振り翳して奮戦苦闘したる宗祖日蓮の大法戰の一生を傳へたる書籍の刊行は既に汗牛充棟も言ならず。されど或は其の法門弘通の勇猛戦に加はり、或は高祖の滅後法華弘通の道に従へる威徳並び喜き法弟の傳記に至つては絶無といふも過言にあらず。本書は即ち著者が宗門景仰の一念を以て、先づ高祖傳をものし、之に加ふるに六老僧、十八中老、朗門の九鳳等、高祖の滅後よく法燈を繼ぎて今日の隆盛を來したる高僧の一生を叙し、更に日蓮宗名刹の沿革及び其の一代の名智の傳記を編み、諸刹の間山及び朗刹住職の傳記を添へたり。乃ち本書は日蓮宗高僧傳の完璧たるのみならず、同時に又一面に於て實に珍重なる寶門也たるを失はず。

中澤臨川先生序
水谷竹紫先生作
本岡國雄畫伯裝幀

熱

灰

四六判約參百四十頁
箱入洋裝頗優美
定價 金壹圓
小包 送料 八 錢

國民新聞評

著者の處女作である。中澤臨川氏は本書に序して著者をキーンマンFに比して居る。それは宛に角として『熱灰』はこの著者にして始めてものし得べきものである。換言すれば當今文壇に僅に別に一特色を出した作、而してそれが處女作であるだけ、其處に著者の將來に期待するところが多い譯である。主人公の秀雄が一度相ゆるして子までなした婦人に對する心持や、其の子に對する心持は、痛ましきまでに端的に暴露されてある。聞く所によれば此小説の爲めに都下の學生界には、『熱灰的體愛』といふ熟語が流行したり、又ある二三の女學校の女學生は此の作に表はれた著者の婦人觀戀愛觀に憤慨して、此の著者を毒り殺さうといふ決議をしたさうである。併し其れは別問題として近來快讀した一佳作として讀書界に推薦するに躊躇しない。

版再

黒岩周六先生序論
茅原華山先生序論
市原自適先生著

益進主義

菊判約百三十頁
洋裝美本
定價 金四十五 錢
小包 送料 六 錢

版再

悲觀には失望の傾向あり、故に人之を非とす。然れども樂觀には現在に満足するの傾向あらざるか、現在に満足することも今の世に必ずしも喜すべきにあらじ。悲觀と樂觀との中間に一の境地を開くものを、メリオリズムとす。ウィリアム・セームス曰く「メリオリズムは現在を悲觀し將來を樂觀するなり。即ち現在の悲むべきを改めて將來の爲めに樂境を開かんことを欲するに外ならず」と。ホール・ケーラスは曰く「メリオリズムは改良せんが爲めの努力主義なり」と。レスター・ワードは又曰く「メリオリズムは倫理といはんよりも活動努力の主義なり。今の悲境を改めて樂境となし、社會をして何等悲むべき箇條なき状態に至らしむるまでは休せざるものなり」と。之れを即ち益進主義と譯す。即ち進みて猶も益々進み行くの義なり。此の主義よりいへば「活きんと欲する意志」よりは寧ろ「優らんと欲する意志」なり。優れ、汝の隣人に優れ、汝の明日をして汝の今日よりも優らしめよ。明日も亦爾かく欲せよ、益進、益進、益進主義なるかな。

メーテルリンク作
島村抱月先生譯
小林徳三郎畫伯裝飾

モンナ・ブнна

紙數約貳百貳拾頁
最新型裝幀高雅優美
定價 七拾五錢
小包 送料 六錢

本書は現代のシエークスピアと稱へられ、又現代に於ける世界の最大巨人と云はれる白耳義の劇作家メーテルリンクの傑作であるのみならず、新史劇の典範でもあり、婦人問題、新思想問題、戀愛問題を取扱つた近代の傑作で、譯者は我國文藝界の柱石にして、殊にメーテルリンク物にかけては當代の隨一人たる抱月先生である。而して原作者が其の最愛の妻ルブラン夫人の爲めに此の作を書き下ろして一舉直ちに世界的大劇作家となつたやうに、抱月先生は其の自ら撫育統率する藝術座の初興行に此の翻譯を提げて眞摯熱烈なる藝術的大運動の門出に就いた。是れだけの事實で澤山である。更めて此れ以上に本書の内容を賑々する必要があるまい。卷末の『内部』一書は秋田爾菴先生の譯筆に係り、死や運命を説くメーテルリンク獨特の領域にあつて就中代表的の氣分劃である。要するに此の二篇を以て近代の大劇詩人の面目は遺憾なく代表される。近代文學に親むものは必讀を要する。

忽五版

徳田秋江先生作
正宗得三郎畫伯裝釘

別れた妻に送る手紙

前後二卷各二百六十頁
最新型裝釘優雅極美本
定價 前編九拾錢後編八拾錢
小包 送料 各 八錢

由來先生は多く作らず、濫りに發せず、時に一度その作を公にするや、總て是れ前人未發の名篇傑作、忽ちにして文壇に驚駭を惹起す。而も又忽ち其の姿を没して容易に發せず。言爲悉く人の意表に出て、秋江の名は文壇のスパイニングス、小説界の謎とせらる。先生の傑作に彼の有名なる別れたる夫人を主題とするもの五篇あり。穿細微妙の才筆古今獨歩天下一品なり。此の五篇の傑作を纏めて所謂『別れたる妻』にタイトルせんとするもの即ち本書なり。

前編 忽再版

前卷には先生の出世作たる『別れたる妻に送る手紙』及び其の續篇ともいふべき『執着』を收む。而して後卷には其の後篇にして且つ最近の作たる『疑惑』及び『小猫』『雪の日』を收む。此等は悉く當時國木田獨歩、長谷川二葉亭、徳田秋聲氏、島崎藤村氏等文壇の大家が口を極めて賞讃したる傑作なりといふを以ても本書の價値は知らるべし。著者は之を以て自らトルストイの『クロイツェル・ソナタ』に比す。又以て本書に對する著者の意氣を觀るべし。敢て天下の文藝愛好家の熱讀を勵む。

後編 忽再版

2/A
70

ニ
ー
チ
エ
著
安倍能成先生譯
小林徳三郎畫伯裝飾

Ecce Homo

この人を見よ

紙數約三百十頁
最新型裝幀優雅極美
定價金九拾錢
小包送料八錢

版再忽

同時代の人々は此の不出世の天才を認めなかつた。眞摯にして寛量なる獨乙の學者まへ殆ど彼の存在を容さず、凡ゆる惡罵嘲笑を彼の著書及び身邊に放つた。彼は宛ら不遇なる救世主耶穌の觀があつた。彼は憤然として基督の言葉を叫んで曰く「この人を見よ！」と。彼は斷じて道徳上の怪物でなかつた。唯だ彼は從來有徳の人として尊敬された種類の人々を反對の人間である。彼は偶像を顛覆せんとした。美しい言葉で所謂「理想の世界」は假現の世界である。虚構の世界である。此虚構の世界の爲めに「眞實の世界」即ち實在は其の意義價値を奪はれた。人類は呪ふべき理想てふ虚偽の爲めに本能の奥底まで虚偽者となつた。彼は乃ち本書を掲げて曰く「此の書を読め！」と。此處に語れるものは狂信者でない。此處に説かるゝものは説教でない。此處に望まれるものは信仰でない。限り知らぬ光の充溢と幸福の寶穴とから、一滴、語一語は落ちて来る。之を聴くものは「選ばれたる人」の特權である。彼の著作の空氣は淨く強き高嶺の氣である。其處に其の氣を呼吸するとき、一切は光の裡にあり、人は自由に呼吸し、多俗は悉く遙に己れの足下にゐるを覺える。同時代に容れられなかつたニ―チエの認められる時は來た。今日は實にニ―チエの人生哲學の勝利の時代である。天下の讀書子よ、「この人を見よ！」「此の書を読め！」

終